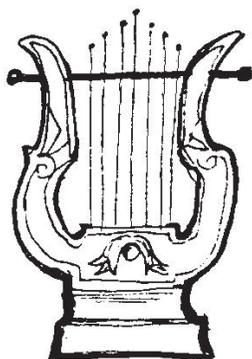


東北学院大学教職員修養会 キリスト者教員研修会 報告書

第 18 号



琴を奏でて主に感謝を捧げよ
(詩編第33篇2節)

巻頭言

2016年度	第61回教職員修養会	1
2016年度	第21回キリスト者教員研修会報告	45
2016年度	第42回サマー・カレッジ報告	49
2016年度	宗教活動報告	59

東北学院大学

「未来をつかむ」(ローマの信徒への手紙第5章1～5節)

表題の「未来をつかむ」という言葉は、キャッチコピーならまだしも、巻頭言の題としてはいささか大それた、奇をてらう表現かもしれません。ならば、「未来を拓く」とか、「未来に明るい見通しをもつ」とすれば無難でしょうか。いずれにしても、現代の日本において、「未来」と言う言葉を聞くとどこか見通しのきかない、漠然とした響きを感じさせます。おそらく、未来はどうなるか分からないし、未来を語るより、今を生きる、とにかく今を充実させることで満足する傾向が強いと思われまます。

ところで聖書は「未来」と「現在」についてどのように語っているのでしょうか。それは、前回の『報告書』第17号の巻頭言に記しましたように、両方について語っています。すなわち、神の国は未来にあると同時に、今すでに到来していると告げられます。神の国や神の救いは未来に完成するにしても、今すでに我々の中で始まっているのです。

「未来において」と「現在すでに」とは、キリスト教教理の中でしばしば語られる用語ですが、しかし「未来」と「現在」の連続した関係は、聖書において様々な言葉の中に示されます。例えば、主イエス・キリストが、「あなたがたはこの世では苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私はすでに世に勝っている」(ヨハネ16章33節)と言われた言葉がそうです。またヘブライ人への手紙第11章1節には、「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」とありますが、これも「信仰」という側面から未来と現在について語った教えです。

ここで、パウロの語る「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」という言葉(ローマの信徒への手紙第5章3-4節)について考えてみましょう。これは今を生きる人間にとって未来へ向かう姿勢とはどのようにあるべきかを明瞭に語った言葉として捉えられます。

そこでまず、「苦難」という言葉を調べると、原文のギリシャ語の意味では、抑圧、プレッシャーという意味があります。英語では、oppression, tribulation という、押さえつけられるという意味です。たくさんのプレッシャーが私たちの周りにあります。現代なら、逃れられない重荷とか、大きな仕事を抱えているとか、貧しさや孤独への不安、病や試練など様々です。

パウロはきっと、幾つもの重圧に耐えながら、宣教活動を続けていたことでしょう。そのプレッシャーから逃げないで、正面から受け止めて日を過ごしている内に、忍耐が身に付いたとパウロは言います。この忍耐とは、固く、丈夫になるという意味があります。なるほど、プレッシャーの中で、つぶされることなく、頑丈になったということです。

さらに頑丈になると、今度は練達を生み出します。この練達とは、英語聖書では、いくつかの聖書が character と訳しています。character とは、一般に個性とか性格と訳されますが、英英辞典によると、「困難や危険を乗り越える強い力をもつ資質」という意味もあるとしています。すなわち、無駄なものをそぎ落とし、精錬されて、純化され、丈夫なものになるという意味です。金とか銀とか、鉄など金属は精錬され、純化されるほどしっかりとした特性と価値のあるものに鍛え上げられるわけです。

こうして、不純なものが除去され、しっかりとした練達 character が出来上がりますと、将来に生じる困難や苦労も、乗り越えられるという自信が、すなわち希望が生まれてきます。それは、未来においてもきっと乗り越えられる、きつとうまくいくという希望です。生きていく上で未来に明るい見通しをもっているということです。それは、さらに人間の死をも克服する何かでなければ本物ではありません。その本物なる希望は、まさに神から来る、神にある希望によって完成するのです。

キリストが十字架にかかって死んで復活されたということは、まさに苦難を乗り越え、希望を世界にもたらしてくださったことを意味します。ここにおいて私たちの希望は決して失望に終わることはない保証されるのです。パウロも言うように、「希望はわたしたちを欺くことはありません」と。それは「聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです」（5節）と続きます。神がキリストを通して私たちを愛してくださっていますから、神からもたらされてくるこの愛が、私たちの希望を保証しています。

「苦難は忍耐を忍耐は練達を練達は希望を生み出す」と言うパウロの言葉は、未来志向の言葉です。幸いで順調な日々だけでなく、苦難や重荷があっても、それを乗り越えていく力を生み出す秘訣が、現在の困難、重荷の中にあります。それは、いずれ未来をも切り開くという希望と自信を養います。未来はつかめるのです。希望は神から来る愛に裏付けられる限り、重荷の中に置かれていようと、私たちの取り組みには永続性、未来性が伴います。

このパウロの教えは個人についてだけ言われているのではなく、私たちの取り組んでいる聖書を土台にした教育についても当てはまります。大学が未来に向けて多くの新しい企画を立案し、遂行しているこの時期、それを担う私たち一人一人が聖書の言葉に支えられ、励まされ、それぞれの職務を誠実に全うできるように心から願います。いずれ大きな実りが与えられることを希望し、さらに前進していく私たちでありますよう祈ります。

2016 年度
第 61 回教職員修養会報告

第 61 回東北学院大学教職員修養会プログラム

日 時 2016 年 9 月 1 日 (木) ~ 9 月 2 日 (金) 1 泊 2 日
会 場 宮城蔵王ロイヤルホテル (TEL 0224-34-3600)
〒 989-0916 宮城県刈田郡蔵王町遠刈田温泉字鬼石原 1-1

主 題 『聖書に聴く』
講演題 『キリスト教大学とは ー明治学院大学の経験を通じてー』
講 師 明治学院大学経済学部教授、元院長・学長
大西晴樹先生

9 月 1 日 (木)

9:00 土樋キャンパス正門前より送迎バス出発
10:00 受 付
10:30 開会礼拝 司会：吉田新先生
奨励：松本宣郎学長
奏楽：今井奈緒子先生
学長挨拶
講師紹介
11:00 講師講演『キリスト教大学とは ー明治学院大学の経験を通じてー』
講師：大西晴樹先生
12:00 質疑応答
12:25 オリエンテーション
12:30 昼 食
13:30 各部屋チェックイン
14:00 グループ懇談『講師講演をめぐって』
15:00 休 憩
15:30 全体懇談「東北学院のステンドグラス」
担当：鐸木道剛先生
18:00 夕 食
19:30 自由懇談

9 月 2 日 (金)

7:00 朝 食
チェックアウト
9:00 朝 拝 司会：鐸木道剛先生
奨励：大西晴樹先生
奏楽：今井奈緒子先生
10:00 全体協議・報告会
12:00 閉会礼拝 司会・奨励：野村信先生
奏楽：今井奈緒子
閉会挨拶
12:30 昼 食
13:30 解散 (ホテル前より送迎バス出発)
14:30 土樋キャンパス正門前送迎バス到着

【開会礼拝】

司会 野村信宗教部長

讃美歌：第 6 番

聖書：新約聖書 使徒言行録 第 13 章 16 節～ 31 節

説教：『歴史は積み重なる』

讃美歌：第 82 番

大学宗教主任 吉田 新

「使徒言行録 第 13 章第 16 節～ 31 節」

そこで、パウロは立ち上がり、手で人々を制して言った。

「イスラエルの人たち、ならびに神を畏れる方々、聞いてください。この民イスラエルの神は、私たちの先祖を選び出し、民がエジプトの地に住んでいる間に、これを強大なものとし、高く上げた御腕をもってそこから導き出してくださいました。神はおよそ四十年の間、荒れ野で彼らの行いを耐え忍び、カナンの地では七つの民族を滅ぼし、その土地を彼らに相続させてくださったのです。これは約四百五十年にわたることでした。その後、神は預言者サムエルの時代まで、裁く者たちを任命なさいました。後に人人が王を求めたので、神は四十年の間、ベニヤミン族の者で、キシユの子サウルをお与えになり、それからまた、サウルを退けてダビデを王の位につけ、彼について次のように宣言なさいました。『わたしは、エッサイの子でわたしの心に適う者、ダビデを見だした。彼はわたしの思うところをすべて行う。』神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主を送ってくださったのです。ヨハネは、イエスがおいでになる前に、イスラエルの民全体に悔い改めの洗礼を宣べ伝えました。その生涯を終えようとするとき、ヨハネはこう言いました。『わたしを何者だと思っているのか。わたしは、あなたたちが期待しているような者ではない。その方はわたしの後から来られるが、私はその足の履物をお脱がせする値打もない。』

兄弟たち、アブラハムの子孫の方々、ならびにあなた方の中において神を畏れる人たち、この救いの言葉はわたしたちに送られました。エルサレムに住む人々やその指導者たちは、イエスを認めず、また、安息日ごとに読まれる預言者の言葉を理解せず、イエスを罪に定めることによって、その言葉を実現させたのです。そして、死に当たる理由は何も見いだせなかったのに、イエスを死刑にするようにピラトに求めました。こうして、イエスについて書かれていることがすべて実現した後、人々はイエスを木から降ろし、墓に葬りました。しかし、神はイエスを死者の中から復活させてくださったのです。このイエスは御自分と一緒にガリラヤからエルサレムに上った人々に、幾日もわたって姿を現されました。その人たちは、今、民に対してイエスの証人となっています。

『歴史は積み重なる』

学長 松本 宣郎

年に一度の教職員の修養会を迎えることとなりました。今年は130年という当学院にとっても節目の年です。特別の想いを持ってここにわたしたちやっけてまいったところであります。

ある場所で、神の目、神の庭にとっては、「千年も一日のごとく」という聖書の言葉を引用したことがあります。長い人類の歴史の中で、私たちの学校の130年はほんの短いものかもしれませんが、しかし地上を生きる私たちにとってはこれはかなりの時間です。そしてその時間私たちの学校は守られ、あり続けたということ、あらためて不思議に思い、また感謝をもって受け止めます。そのようなことを覚えつつ、この修養会でも、建学の精神を振り返り、当学院のために働いている者たちの学びの時としたいと思います。

さて、私は専門が歴史であって、その話題へ思いがいくのでありますけれども、歴史というのは要するに、川の流れのように流れ去っていく、絶えず変わりなく、今のものは過去になり、未来のことがやがて今になり、そして過去となって流れて去っていくという、そういう捉え方があります。わりあい日本人の歴史のとらえ方には、こういう傾向が多いのではないかと友人の哲学者が指摘がしています。鴨長明の「行く河の流れは絶えずして」という言葉は典型です。そういえば日本の首相がそう言っています。第二次大戦の中で日本がアジア諸国に対して過ちを犯した、そういう反省の念とか、謝罪の言葉は、もう我々以後の若い世代に負わせるべきではない、彼らに責任はない、そういうことをはっきり言ったと思います。その首相の歴史観自体が歴史は流れ去るもので過去のことは忘れ去られるだけだと思っているかどうかは別として、このようなレトリックを使えたということは、過去のことはもう過去のこと、我々が直接見聞きしなかったことはあまり関係ない。未来志向という言葉をよくこの首相は使いますが、このような言い方はわかりやすく響くかも知れません。一方でその同じ哲学者は、歴史というのは、そのように流れ去ってしまって、今あることとは関係ないというふうな見方だけで済まされるものでは当然ない、人間の感性の上でもそれは理解できない部分がある。つまり歴史はある意味で「積み重なる」、そういうふうな見方をします。私も、その今日は「積み重なる」という意味で、歴史を捉えたいと、そのような思いでいます。

この哲学者はいわば人間にとって過去の歴史は、ガラスのように重なり、その積み重ねの

上に私達が乗っかっていると言うのです。もちろん刻一刻とそのガラスは付け加わっていくわけです。だんだんと我々は積み重なるの増えていく上に乗っかっているんだ、そういう見方をします。そのガラスは透明なので、下の方をじっと見ていると、過去の、つい先ほどあったリオ・オリンピックでの選手の活躍は割合はつきり見ることができるし、5年半前の大震災についても、あるいは第二次世界大戦の悲惨ないろんな世界の状況も、積み重なったガラスの底の方に、下の方にあるけれども見ることはできる。更にその下には、江戸時代が見える、というそういうふうなイメージで歴史を捉えるのです。となると、流れ去らない歴史、積み重なった思い出の上に、私たちはいる。そのような捉え方になります。

少し話は飛びますけれど、フィリピンの北の方にペリリュー島という島があります。名前はお聞きになったことがあると思います。つい2年ほど前テレビなどで取り上げられ話題になり、特に今年は後に述べます理由で私たちの耳目に新しい印象を残した島であります。南北9km、東西は3kmと小さな島ですが、第二次大戦、太平洋戦争の時期には日本にとっては重要な軍事拠点となった。やがてそこにアメリカも上陸することになる。アメリカ軍の侵攻に伴い、このペリリュー島にいた日本軍はその攻撃にさらされてほぼ全滅したのであります。大きな悲劇でありました。生き残った方が34名、この方々は戦争が終わってからもかなりゲリラ的に、戦いを継続する意思のあった人たちであったようではありますが、捕虜となった。捕虜となって辱めを受けるなどという日本軍の掟に逆らって、あえて捕虜になった人たちもほかにいて、その人たちが202名、しかし驚くなかれ、この島で戦死し、あるいは自決した日本兵は、10,695名だったという記録が残っています。一方アメリカ軍の戦死者は2,336名、しかし精神的に病んだアメリカ兵たちもたくさんいた。われわれはテレビ番組ではありますけれどもこのような事実を知らされることができたわけです。いま現在この島は、小さな太平洋の独立国パラオの一部となっていますけれども、今年の4月9日に天皇、皇后がこの島を訪れたわけです。第二次大戦のこの痛ましい出来事のあった場所を天皇は訪れたのです。天皇にとって、歴史は流れ去らない、そういう意識なんだろうと思います。彼にとって、第二次大戦、特に日本人が味わった苦難の歴史というのは、積み重なってその上に天皇もいると、そういう意識だろう。ここに私は彼と首相のちがいを思うわけです。私としてはこの天皇の想いに共感を持ちつつ、私達もまた積み重なった歴史の上にある。何万枚という過去のガラスの上に私たちは乗っかっていると、そういうことをイメージしたい、それですべての歴史の流れが説明できるわけではありませんけれども、そのような観念で観ることの大切さということ、私は思っています。

さて、聖書の、旧約から新約まで通しての考え方はどうだろうかということ、やはり積み重ねの上にあるという意識で聖書の言葉は語られ続けている、というふうに思います。旧約の創世記から論じますと長くなりますから、イエスのことでお話ししますと、彼は宣教の間、

たびたび自分の行動なり言葉なりで、旧約のイザヤ書などの預言の言葉が「成就する」ということをよく言いました。終末の時についても聖書に語られている。あるいは、「わたしが来た、神の子たる救い主がきた」、このこともまた旧約以来の律法が成就した、長い歴史の中、この時点で神の計画が成就した、というふうに何度か語ります。そしてキリストは十字架につけられて死ぬということを予告して、その時を全うしたわけですが、そこに至る神の救済をまさに歴史として、積み重ねの歴史としてイエスは語った、と言ってよいと思います。そしてイエスが十字架に死に、復活したと信じて生まれたクリスチャンの群も同じだったと思いますし、その度合いはより強く表現されていると思います。それは、使徒言行録によく表されています。使徒言行録の2章の14節から36節を、後でご覧いただければいいと思うんですが、ペトロは旧約の昔、アブラハムの時代まで引用しながら、いかに長い歴史の中に我々がいるかということ強く意識し、そのことを訴えています。またステファノは同じように説教あるいは演説をした挙句に、ユダヤ教徒たちによってリンチにあって殺される人ですが、使徒言行録7章1節から53節、これは時代的なスパンも一番広いと思いますが、アブラハムがメソポタミアを出発して、地中海にやってくる。その後については預言者について、語り続けます。長い歴史を流れ去らせず強く意識しそのことを訴えていく、その歴史の果てに神の救いもたされた、と語ったわけです。

さて、今日の箇所でも、パウロは使徒言行録13章の16節以下、モーセという名前はないにせよ、エジプトからの脱出の記事から始めて、歴史を導く神によって、ダビデ、ソロモンを経ながらついにアブラハムの末、ダビデの子としてイエスが来られる。神の言葉を宣べ伝え、十字架で殺され、しかし復活した、そのことを訴えるわけであります。ステファノと違ってパウロは、伝道場で殺されることなく、これを語ったのはピシディアのアンティオキアという小さな町ですが、他の場所においても同様の言い方で、神の救済の歴史の末に我々が、いよいよキリストによって救われるのだ、そのように伝えたのであります。

さて、このように積み重ねる歴史の上にあるということが、パウロによっても語られ、それを我々も受け止め、我々もまた過ぎ去らない歴史、私達の下に積み重なっている歴史として捉える。そしてそれはなによりも歴史があるから我々が立っていられるというふうに考える、ということなのです。パウロが告げ、ペトロが告げたようにキリストの到来、十字架の死と復活によって、その積み重ねに意味がある。いやそもそも、積み重ねの一番下にある神の創造からこの今に至るまで、その積み重ねが神によってある、神の導きによって積み重なっている、そのことを思うべきであろうと考えます。

東北学院の存在はその意味で、積み重ねのガラスの中では一番上の方になるでしょう。地球が生まれて45億年とまで大袈裟なことは言わなくとも、人類は生まれて600万年とか、あるいは現世人類せいぜい5万年とかいいますが、本当に想像を絶する積み重ねの中

ですけれども、キリストの十字架という出来事が起こってからも 2,000 年、そしてその 2,000 年のうちの 130 年、東北学院の歴史がある。私たちの足元に積み重ねられている。そのことを思いつつ、改めて神の計画の壮大さに思いをいたしたいと思いますし、そのことを思いつつ、この修養会の時を過ごしたいと思うものであります。

お祈りをいたします。

神様、今年も東北学院の夏の終わりの修養会の時を与えてくださいます感謝いたします。ここに集まりました者たちに、どうかしばしの間あなたに思いをいたし、あなたが建てて下さった東北学院の 130 年の歴史に思いをいたし、そして与えられたこの学院をよりよくしていくために私達にあなたが何をせよと命じておられるかということを考える時としてくださいますように。そしてこの修養会のために、励ましのメッセージを携えておいでになった先生もあなたが絶えず励まして語らせてくださいますように。東北学院に連なる者たちは本当にたくさんいます。あなたによって生かされ、この東北学院に学び、働き、あるいは卒業していきました。それぞれの人々の上に与えられた恵みを感謝しますとともに、これからもまたあなたがその者たちの導き手となってくださることをお願いいたします。これらの感謝と願いとを、私たちの主イエス・キリストのお名前によって御前にお捧げいたします。

アーメン。

主題講演「聖書に聴く」

『キリスト教大学とは
—明治学院大学の経験を通じて—』

明治学院大学経済学部教授 大西晴樹 先生

講師略歴

大西 晴樹

(おおにし はるき)

明治学院大学経済学部教授

1953年3月10日 北海道生まれ

学歴

- 1971 (S46) 年3月 北海道深川西高等学校卒業
- 1975 (S50) 年3月 法政大学法学部卒業
- 1978 (S53) 年3月 明治大学大学院政治経済学研究科博士前期課程修了
- 1983 (S58) 年3月 神奈川大学大学院経済学研究科博士後期課程満期退学
- 1996 (H8) 年3月 学術博士(経済学)取得

職歴

- 1983 (S58) 年4月 明治学院大学経済学部専任講師
- 1986 (S61) 年4月 同助教授
- 1993 (H5) 年4月 同教授
- 2004 (H16) 年4月 明治学院大学経済学部長
- 2005 (H17) 年9月 キリスト教学校教育同盟「百年史」編纂委員会委員長
- 2008 (H20) 年4月 明治学院大学長
- 2012 (H24) 年4月 学校法人明治学院長

現在

- キリスト教史学会理事長
- 文部科学省高等教育局私学部学校法人運営調査委員

主な著書

- 『イギリス革命のセクト運動』(御茶の水書房) 1995年
- 『ヘボンさんと日本の開化』(NHK出版) 2014年
- 『キリスト教学校教育史話』(教文館) 2015年

主題講演「聖書に聴く」

『キリスト教大学とは ―明治学院大学の経験を通じて―』

明治学院大学経済学部教授（元院長・学長）

大西 晴樹

みなさん、おはようございます。明治学院大学の西大でございます。

実は、私の田舎は北海道の深川市というところでございまして、旭川の近くの田園地帯でありまして、東北学院には親しみがございまして。といいますのは、私はだいたい1学年270人ぐらいの男女共学の道立普通科高校の卒業なんですけれども、その中から2人、私の知っている限り2人が東北学院の卒業生でございます。1人は女性でして、高校時代に英語劇をやっていた、いわばマドンナ的存在でありまして、東北学院の英文科を卒業して、田舎に帰り英語塾を開いておりました。私は学生時代に帰省する際に、当時は電車でありますから、仙台の東北大学の友人やまた札幌の友人らと訪ね歩いてですね、のらりくらしと帰るんですけども、仙台でその友人に会った時にですね、どうだ訪ねてみるか、などという話になるわけですね。不思議なことに胸がときめいた覚えがあります。もちろん、そんな勇氣はなかったわけでありまして、そんなことが漠然として残っております。もう1人は男性でありまして、小学校が実は一緒だったんですけども、助役の息子でした。確か経済に進んだと思うんですけども、クマヒラに入ったという話は聞いたんですけども、残念ながら私より一足先に天国に召されてしまいました。そんなことでですね、今はどうかわかりませんが、東北学院に北海道からも私の時代は入学していたということをお話した次第であります。

さて、今日の講演の話をいただいた時に二つ返事でお引き受けいたしました。といいますのは、東北学院の先生方に私は大変お世話になっております。後でお話ししますが、先程もお話が出ましたが、キリスト教学校教育同盟というプロテスタントの学校法人が集まった組織でありますけれども、その結成100周年の年史編纂作業を引き受けました。私自身は西洋経済史、イギリス史がフィールドなんですけれども、所属しているキリスト教史学会から出てくれということで、いまから13年ほど前に逗子の湘南国際村に集まりまして、そこから編纂作業が始まりました。そこで、最後まで顧問としてお付き合いいただいた先生が、先程松本先生からお話に出ました出村彰先生でありまして、教会史の権威でありますけれども、その先生とご一緒に最後まで仕事ができたと大変うれしく思っております。

ます。また、松本先生にもお世話になりました。松本先生には宮城学院長時代にですね、私、キリスト教史学会という学会の、今もやっておりますけれども理事長をしております。宮城学院で学会を開く、その最後に公開シンポジウムをお願いしたいということで、松本先生もそのお話を引き受けて下さいまして大会は大成功でありまして、松本先生もお世話になっているなあ、ということでもありますし、また前学院長であります、星宮先生とも教育同盟、あるいは私大連でもずいぶんお世話になった次第であります。こういうことを考えますと、東北学院から話がきたということは、お返しをしなきゃいけないなあ、という思いでやってまいりました。

実はまた他にもですね、東北学院とは東北大震災を通じてこんなやりとりがありました。皆さんご存知のとおり明治学院は賀川豊彦を輩出したボランティアが盛んな学校であります。日本で初めてボランティアセンターを設置いたしました。阪神淡路大震災の経験でボランティアセンターを作ったわけでありまして、東北大震災がはじまって、結果が明らかになるにつれて、ボランティアをどうしたらいいかということになったんですけれども、とにかく現地は大変な混乱だろうから迷惑になると。しかし、ボランティアということは足がかりがないとできません。とはいっても迷惑になるばかりでありまして、なんとか東北学院の方で引き受けて下さらないかなと思っていました。結局本部に掛け合って、私自身も掛け合ってますね、お願いした結果、少数のコーディネーターを含む部隊ならば、ということで仙台の地に入らせて頂きました。東北学院がボランティアステーションを立ち上げるさいに、本学の経験をお話したということもあって、よかったねという形で先発部隊はそれなりの役割を果たしたという形で帰ってまいりました。また、その後、多くの学生たちが東北の地で活動することになるんですけれども、私が差し入れに行ったのは、気仙沼・唐桑地区でありまして、そこは東北学院大学のお世話でいくつかの大学の学生がきておる場所でありまして、そこで差し入れをいたしました。「何が必要か」と言ったら、「フルーツを持ってきてほしい」ということで、学生たちにフルーツを届けたことを思い出しております。そんなことでありまして、一方的にお世話になったことばかりか申しますと、もう一方ではこんな話があります。東北学院の法科大学院の院生がやはり勉強するところがなくて困っているということで、じゃあ明治学院の法科大学院を開放しようということで、明治学院大学の法科大学院に入って、司法試験までという条件で受け入れました。そういうことでお互いに、いってみれば、行ったり来たりの関係が出来たということがあります。

前置きはこのぐらいいたしまして、今日はですね、キリスト教大学あるいはキリスト教教育についてお話するというであります。皆さんも承知の通り、近年の日本の高等教育の再編というのは、実は急速な勢いで進展しています。東北学院も学則改正を余儀なくされたと思いますが、昨年度施行された改正学校教育法で、学長主導の権限が強化され、教授会は学長に意見を申し述べるにすぎない組織と位置づけられるようになりました。また、86校ありました国立大学法人においては、3分類から大学が一つを選択するということが余儀

なくされております。これは今年中に結論を出すということだったんですけども、3分類というのはご承知の通り、「世界最高水準の教育研究」「特定の分野での世界的な教育研究」「地域活動の中核」といった分類の仕方であります。膨大な運営交付金がそれぞれの分類の中で高い評価の大学に傾斜配分されるわけであります。国立大学にはですね、大学法人化の際に、それぞれの教育目標を定めたところもありましたが、それらの先生方はみんな悔しがっておりましたけれども、国の指示によって、いってみれば、この分類に入るということになります。私のような年配の者には、皆さんご存知だろうと思いますけれども、かつて一期校、二期校とかいう区別がございました。これは入試についての区分なんですけど、旧帝大はすべて一期校に含まれており、この区分というのは入試のレベルを物語っていたようにも思われます。今回はですね、「世界最高水準」とか「特定の分野における世界水準」とか「地域活性化」という文言が入っておりますので、大学の特色よりはむしろ大学のレベル向上のための分類が迫ってきているよう気がしてなりません。こういうふうにして、競争を促そうということでもあります。

昨年久しぶりに、学会に出席してきました。西洋史学会という学会で、富山大学で開催されましたけれども、そこで久しぶりに研究仲間会に会って、国立大学はどうか、という話をしたのですが、いや大変だ、という話を聞かされました。歴史学や文学、哲学などの人文系の教員はですね、重点化大学以外には、年々削減されている。その分、理工系、特に技術系の教員が増大しているということでもあります。教員の業績評価もですね、理工系の基準を適用していると思われぬ基準で行われるようになってきて、成果主義が重視されるようになってきたということでもあります。また、年俸制を選択できるんだけれども、自分たちはそうではない、というようなことも話しておりました。評価の難しい人文系、あるいは社会系の教員にとっては、戦々恐々とした日々を過ごしているような様子が伺えました。文部科学省によれば、最も世界で権威があるとされている Times Higher Education で、現在世界ランキング 100 校中わが国では 2 校しか入っていません。東大・京大しかランクインされておられませんけれども、これを 10 年で 10 校に増やすということをしようとしているのでありますし、また授業料もですね、国立大学と言えば安い授業料ということだったのですが、年間 56 万円から次第に 80 万円台へと引き上げるということですから、この競争原理の方法は、いってみれば、高等教育に対する国家行政介入もさることながら、人文社会学の学問教育は最もほんの一握りのエリート層の教育を除いて私立に委ね、国策としての技術国家を強力に推進するというふうになるのではないのでしょうか。

しかし、日本の高等教育史を紐解きますれば、国立大学法人が国家の行政に基づいているというのはそう不自然なことではありません。というのはどういうことかと申しますと、明治政府が産業革命のインパクトによる高等教育再編成の中で、高等教育機関として大学を位置づけたのは、1886 年、ちょうど東北学院の創立した年であります 130 年前の明治 19 年のことでした。帝国大学がそうありますが、政府は帝国大学を「国家の須要に応じる学術技

芸を教授研究する大学」というふうな位置づけをしております。それと同時に以下、京都・東北・九州の順で帝国大学を学校教育体系の頂点に押し上げていくことをいたしました。先程言いかけてましたが、国立大学だけが建学の精神がないといったのはまさにこの点にありまして、国立大学の建学の精神は、「国家の須要に応じる学術技芸」、すなわち国家が必要とする学問の教育と研究ということになるのであります。他方、独自の建学の精神をもつ私立大学は、当時まだ大学と名乗ることはできませんでした。帝国大学令に遅れること17年、1903年に issuanceされた専門学校令によって私立大学は大学ではなく、専門学校として位置づけられました。しかもその条文にはですね、「高等の学術技芸を教授する学校」でありまして、残念ながら「研究」という言葉は入ってきません。それはあまりに不公平だということで、1年半程度の予科をもつ専門学校は正式な学校ではない、大学ではありませんが、大学と名乗ることを許可されたという次第であります。これより慶応・早稲田と、法政・明治・中央という法律系の私学が、いわばいってみれば、曲がりなりにも大学と名乗ることができたということであります。私立学校が正式に大学となったのは、さらに15年ほど遅れて、1818年(大正7年)の私立学校令を待たなければなりません。

私どもキリスト教学校は、近代・現代史の中において、どのような役割を果たしてきたかという話ですが、文明開化後、宣教師を主軸として生まれてきた時期にはそれなりの役割を果たしてきたわけですが、国家の須要という点においては、むしろ必要とされていなかった、いささかショッキングな話をしなければならなくなります。そしてまた、一撃されたという話もしなければなりません。これはどういうことかと申しますと、1899年、悪名高き文部省訓令第十二号ということであります。キリスト教学校の男子の中等教育に対してですが、官立・私立を問わず、課程内であろうと課程外であろうと、宗教教育を禁止するという訓令が出されました。訓令というのは勅令よりはその重みは低いんですけども、管轄省庁の権限で出される法令であり、それなりの拘束力をもつ法律でありました。初めは私立学校令にこれを定めたかったのですが、宣教師たちの反対により文部省訓令として出されたわけです。すなわちキリスト教学校は礼拝を行ない、キリスト教を授業で教えるとするならば、正規の中学校や高等女学校であることを止め、各種学校にならなければならないということでありました。なぜこんな法律が出てきたのか、ということですが、当時日本は条約改正の時期を迎えておりまして、外国人の内地雑居が許され、外国人の経営によるキリスト教学校が、これ以上日本に広がることを恐れた政府によって仕掛けられたのであります。その当時既に、現在103校でありますけれど、47校の学校がキリスト教学校として産声をあげております。明治の日本は瞬く間に西洋知識を駆使してですね、いって見れば、アジアの世界で近代化が行われた、ということでもあると思います。当時の仏教学校、同じ宗教教育ならば仏教学校はどうなんだ、ということですが、仏教学校はまだ僧侶養成の学校でありまして、普通教育を施す学校としては、キリスト教学校は大きな人気を博していたということになります。130年を迎える東北学院の年史をちょっと紐解いてみま

したが、1891年から東北学院として普通高等教育を施すことができるようになったというふうに書いてありますが、これは実はこういうことでありますが、各種学校としておけば学生は集まらない。当時高等教育の需要っていうのは大きなものがありまして、産業革命が進展するにつれて、文系のホワイトカラー、あるいは専門職を養成するところとして、非常に望まれたところになりました。そういった状況においてですね、いってみれば、中学校が各種学校になるとどういった不便さがあるかという、徴兵免除の特権がなくなる、学校に行けば兵隊に引っ張られることはなくて済むというそういった特典がなくなる。それから高等学校という上級学校への進学も出来なくなる。そんな不利な条件をキリスト教学校は呑まされるというふうになりました。この法律に対してはですね、いってみれば、六校開書といまして、青山、同志社、明治学院、立教、名古屋学院、それから東洋英和、これはいま麻布高校という名前に変わっておりますけれども、キリスト教を捨てまして受験校となりましたけれども、こういった学校が反対運動の先頭をきったわけでありまして。キリスト教学院の指導者たちは、時の文部大臣樺山資紀、総理大臣山縣有朋、また元総理大臣である大隈重信とかあるいは伊藤博文などを訪ねまして、なんとかしてほしい、教育ができなくなる、ということ陳情しました。明治学院の記録によりますれば、その年の卒業生はたった3人しかいなくなっちゃった、ということでありまして、特権がなくなるとどういった目に遭うのかということを示しているわけでありまして。これはですね、100年史の議論になったんですけども、一気に政府はキリスト教学校を潰せたのにどうしてしなかったのか、もちろん、同志社が政府に対して大きな力を持っているとかですね、いろんなことがあったとは思いますが、どうして潰さなかったのかということについてはですね、やはり半ば市民権を得ていたキリスト教学校を敵に回すとなかなか大変だ、ということもあったんじゃないかということで、やがてですね、今いった上級学校の資格とか、あるいは徴兵制に関しては、免除するという形で指定校、あるいは認定校という扱いのもとに存続することが許されたということになります。従って東北学院もそのような形で徴兵とか上級学校への進学が許されたということになってくるわけでありまして。

明治学院の卒業生で二高に進んだ方とインタビューをすることができました。仙台に行っただうでしたか、というふうな話を訊いたところ、いや軟弱だとかですね、正規の学校じゃないとかいわれ、ずいぶん寮で殴られたというような話を伺ったんですけども、そういうようなことでしてね、いってみれば、キリスト教学校というのは、この訓令第十二号でその発展を抑えられたということも紛れもない事実であったわけでありまして。この訓令第十二号、実は、1945年敗戦直後の訓令第十号、各キリスト学校において宗教教育をしてよいという法律ができるまで、半世紀近く続いていったということになります。

じゃ、キリスト教学校教育はその間、いってみれば、沈滞していったかということといえば決してそうではございません。それからは私もですね、100年史で、この先生の名前を覚えることはできたんですけども、東北学院第2代院長シュネーダーという人のお話をした

いと思います。100年史にも書きましたけれども、そのような状況の中ですね、シュネーダー先生はですね、こういうレポートを書くわけでありまして。どういうレポートかと申しますと、キリスト教教育の方針というレポートであります。これはですね、1917年の第7回同盟総会で、翌年ホーイ先生が発行した『ジャパン・エヴァンジェリスト』(The Japan Evangelist)という雑誌に掲載され、英語でしか読めないレポートなんですけど、最近翻訳が出ました。シュネーダーレポートというものがどういったものだったのか、ということについてお話していきたくて思っております。これまでですね、日本人の理解するキリスト教育とは何かと申しますと、実は品位であるとか、あるいは良心であるとか、例えば新島襄ならば、「良心を手腕とする人間」という形で良心であるとか、そういう言葉が出てくるんですけども、品位とか品行とかですね、良心が意味するものは一体なんなんだろうという点についていえば、一步も二歩も踏みこんだのがシュネーダー先生ということになります。大変優れた、いってみれば、先生はですね、東北学院の「中興の祖」と評価されているわけでありましてけれども、この方はですね、どういうことをおっしゃったのかということなんですけど、一步も二歩も日本人よりも踏み込んでキリスト教教育とは何か、ということについてわかりやすく説明したのであります。まず教師像ですが、こういうことを述べています。少し長くなりますけど読んでみます。「全員キリスト者で構成されるべきであるという究極の立場はありえそうもない。学校について、教師についてですけれども、しかしそのあり方を支持して語るべきことは多くある。いずれにせよ人格は学識や教授能力よりも上に置かれるべきであろう」、ということであります。我々大学教員はですね、専門職として、いってみれば、論文が評価されて、職に就いたということでもありますけれども、しかしながら大学においてはその研究という性格上、論文は確かにひとつの大きな人事の要件になりますから、それより大切なことがあるということは、実は私たちがですね、知識の伝達者、自らの専門性を学生に伝える時に非常に大きな役割を果たす、その教育というものにおいて、心しなければならぬということでもあります。それが「人格は学識や教授能力よりも上に置かれるべきであろう」、ということでもあります。更にキリスト教教育の目的についてはこうも述べています。「我々の教育の中心的な目的と目標は、政府の学校教育を補完することによって国に役立つのを第一義的としない。すなわち大規模で成功した有力なキリスト教学校を立ち上げることでなければ、キリスト教の改宗者を得ることでもない。我々の中心的な目標と目的は、あるタイプの人間、Certain type of man と言っていますけれども、それを創り上げることでなければならぬと信じる」、というふうに言っているのです。宣教師がですね、学校教育、キリスト教学校教育の目的を改宗教育ではないということをはっきり言っているんです。あるいは、官立の補完のための学校でもないということもここで言っている。では一体何なんだ。私たちが養成しなきゃいけない学生と理想、というのは一体何なのか、ということになるわけですけども、これを、'Certain type of man' と言っています。「消極的というならば、風潮に流されたり、人間が置かれた環境に素直に服従しない人間であるという意味である。積極的というならば、

自らの目的のために真理を考えたり、愛したりする人であり、その知識は消化されており、記憶された事実の単なる集合体であるよりも現実的に即したものである。道徳的人間は、なにかなくキリストの霊と奉仕の自己犠牲の霊によって支配される人格をもつ。すなわち人間は、高潔で公正で誉れ高きものであり、真実と正義を成功よりも高く位置づける。すなわち、その義務や従者や国民に対して深い責任感を持つ人である。改革のある、改革になる勇気を持つ人であり、救済者になるための愛情や共感や友情を持つ人である」、というふうはこの人間のタイプについて言っているわけであります。長くなったので要約しますが、こういうことだと思えます。他者に付和雷同することなく、自分で考えることができ、その知識は羅列ではなく、実践的なものとして昇華されている。一言でいえば、他者のために貢献できる自立した責任主体を、キリスト教教育は作り上げるんだという気概が、この言葉の中に感じられると思えます。このような教育方針は、キリスト教学校を官立の学校の貧しい模倣にさせないであろうし、またキリスト教学校の中等、高等学校を、官立の高等学校を単なる継続校とさせないだろうし、注目したいのはキリスト教の高等部、キリスト教大学を狭い意味での職業学校にはしないのである、というふう述べているということであります。いってみれば、キリスト教教育ということについて、分かりやすく言ってみれば、外国人に説明されたというところに、私達の壁があるかも知れませんが、ただこういうふう日本人に分かりやすく語ってくれた先生がいた、ということはすばらしいことではないだろうかと思える次第であります。

さて、100年史を編纂して、思った時にですね、キリスト教学校教育の意義というのは、日本において大きなものがあるんだけど、ひとつだけ悔いが残ることがございます。これ何であったかという、キリスト教学校の神社参拝の問題でありました。神社参拝が活発になったのは、我々「15年戦争」と言っていますけれども、中国との戦争が始まってからです。それ以前にもですね、国民儀礼として、いってみれば、教育勅語を読んだり、そういうことはあったのですけれども、ただ神社という宗教団体にキリスト教学校が出かけて行って参拝するというのは、なんとか回避してきたということもあったと思えます。時の教育同盟の執行部がですね、いってみれば、どういう態度をとったかということに関して言えば、残念ながらカトリック学校の例を、言葉は悪いです、悪用した部分があるんじゃないかという気がしてならないのです。どういうことかという、あからさまな反対をしないで、文部省見解をまって、それにのる。そのことによって、自らの罪責、罪の意識を拭ってきた。そのことによって、自分たちの身を守ってきたというのが、この時代のキリスト教学校の指導者たちのあり方ではなかったのかと思えます。どういうことかと申しますと、いってみれば、中国との戦争が起こり、いってみれば、神社に行かなければ国民ではないという風潮ができ、学校教育もその中で行われるわけでありますけれども、ひとつ大きな事件がございました。それは上智大学で起こった靖国神社参拝拒否事件でありまして、1932年に上智の学生たち、男子校でありましたけれども、学生たちが靖国神社を参拝したところ4人の学生が実

は靖国神社を参拝しなかったということを配属将校から告発されたという問題が起こってまいりました。当時上智の学長は、ドイツのイエズス会、ドイツ人だと思えますけれども、ホフマン先生であります。4人の学生たちの信教の自由を思えばこのことを問題せず、というふうな態度をとったんですけれども、これに配属将校は納得せず、男子校から引き上げるという結果になりました。どういうことかと申しますと、いってみれば、配属将校がいるということは、軍事教練の単位がもらえるということだけではなく、もちろん兵役免役の特権を有し、また卒業後幹部候補生にもなれるといことを意味しておりました。従って、上智は男子校としてそのような特権を奪われてしまったということになるわけです。先程申しましたけれども、プロテスタントの学校はですね、1899年に教育同盟を結成し、一致団結しておりまして、この問題についてどういう態度をとったらいいかということをも兎角考えたわけですけれども、カトリックの学校に対して文科省のいうことに便乗しようという態度をとったわけです。すなわち、神社参拝は宗教じゃない、国民儀礼や愛国心の、いってみれば、発露を示したにすぎない問題であって、これは国民儀礼としてこれを学校教育で行ってよいということをも、逆手にとって、ならばプロテスタントもそのようなことをしよう、という態度をとっていったわけでございます。上智の干され方は大変なものであります。1年半にわたって陸軍将校からいじめられたといっても間違いではありません。学校教育においてカトリックの方が歴史は浅いですから、いってみれば、ついに配属将校が戻ってくるまで1年半、かかったということです。ホフマン先生はですね、配属将校が戻ってきたときに、今上天皇陛下万歳をしたということでもありますし、また自ら教えていた修身科の授業を、井上哲次郎に、不敬事件の時に、内村鑑三に対する攻撃の急先鋒であった哲学者に変えてしまった、ということにもなりました。それからまた自ら靖国神社に参拝したということもございまして、全くの上智の敗北をもってこの事件は終わったことになります。

さて、この影響はプロテスタント学校が、黙っていたことによって、もっと波紋は広がっていきました。それは植民地のキリスト教学校に対する影響でした。当時、台湾にはですね、台南市というところに今は長栄大学といえますけれども、かつて長老教中学といったんですけれども、そこは日本人の校長を擁して、現地語での非常にユニークな教育をしていたんですが、そこの台南の在留邦人たちが騒ぎ出しまして、神社参拝をしない長老教中学はけしからんということをも騒ぎ立てまして、長老教中学も神社参拝を行うようになりました。それからまた、韓国朝鮮は、もともとキリスト教の影響っていうのは、朝鮮半島では大きいですから、多くの私立学校がありましたが、ピョンヤンの主な長老系の学校ですけれども、10校が神社参拝を拒否したということで廃校になった、という歴史がございまして。実は、明治学院ではですね、スンシルというソウルにある長老系の学校と姉妹校なんですけれども、私が訪ねた時にキム学長から、実はちょっと来てください、ということで校庭に出まして、白馬の像を見せられました。騎馬民族の象徴である白馬が天に上がっていく、その姿ですけれども、それが実は真ん中で切れているわけです、尻尾と頭しかない。これ、なんだかわかりますか、

というふうに聞かれまして、これは植民地の時期にスンシルが、神社参拝を拒んで解散させられたという時期の記憶ですね。その通りです、ということで、お茶でも飲みませんかということで学長室に再び誘われましたけれども、そういった経験をしたことがございます。それぐらい、いってみれば、大きな影響を及ぼしたという事件でもあるわけでありまして。したがって、いってみれば、学校の判断というのはそういうものであるということを知っていたらありがたいと思います。

さて、歴史の話はこれぐらいにいたしまして、いってみれば、今日のテーマはですね、明治学院大学での経験からということで、現状についても話してほしいということでもありますので、この話をしたいと思います。東北学院が始まって130年ということで、大変記念すべき年に呼ばれたんですけれども、私は松本先生より紹介がありましたように、明治学院に34年間勤めております。学部長、学長、学院長と10年間管理職をやってきましたが、その間にですね、創立150周年を迎えました。明治学院は、遠く文久3年、今の山下公園の近くにあって横浜外国人居留地において、アメリカ人宣教師ヘボン夫妻によって開設された英学塾に淵源いたします。これについてはですね、その後NHKラジオからも話してほしいということで、カルチャーラジオの番組を担当いたしましたけれども、150周年に際してヘボンによって建てられた学校ということを見直すことによって、どういうことができたか、という話をしたいと思います。現在ですね、建学の精神は、価値観の多様性の時代、あるいは、クリスチャン教職員の減少ということによって年々、いってみれば、理解されるのは難しくなっているのが現状である、ということにもなっています。私が就職した34年前は経済学部には30数名のファカルティでしたけれども、そのうち7名ほどはクリスチャンでありまして、現在は50名を超えているんですが、たった3人しかおりません。クリスチャンの数は減ってきております。また、あとかなりショックだったのは、学長のクリスチャンコードの廃止運動が半ば広がりまして、1995年には条件付きでクリスチャンコードが廃止されました。それ以来、おもに教員の選挙によって学長は選ばれるんですけれども、そこでクリスチャンじゃない学長が3代続きましたけれども、私の時から2代学長はクリスチャンが続き、今回またクリスチャンでない学長という形で、いってみれば、交互しているということでもあります。学長のクリスチャンコードだけで、建学の精神が表現されるということではない、これは当然のことではあります。ただ、クリスチャンじゃない人が大学の学長に就任すると、大学教育の教育方針が大きく変わることになるのではないかとすることは、大きな議論になったことでもありました。また、そのことをできるだけ回避しようというのが、私が学長時代に心に抱いて考えていたことでもあります。

実は私の前学長時代にですね、佐藤可士和さんという、当世一流の、私も一流のデザイナーだと思っていますけれども、その方を招いてですね、ロゴマークとスクールカラーを作り決めました。“Do for Others”という言葉を教育理念として定め、黄色を用いたロゴマークを採用いたしました。これについては、長年、150年の歴史の学校ですから、スカーレット

とシルバーのツートンカラーに親しんできた同窓会から強い反対にさらされ、賛否両論が湧き起こっていたわけであります。私が就任した時にですね、これについては非常に難しいデリケートな問題なのでこういうことを心がけたわけです。一つはですね、伝統ある明治学院が一朝一夕にですね、教育理念や本学マークを追加、変えていはずがない、ということです。学長が変わるたびにロゴマークや教育理念を変えていたら学生たちは苦勞すると思います。何がよくて何が悪いかを知るためにですね、いってみれば、この問題については、第三者委員会に調査を依頼いたしました。その結果、こんな結果が出てまいりました。佐藤可士和さんを起用し、ロゴマークを変えることで明治学院の知名度は高まりました。しかし、実際入学したい大学かという、そういう点では知名度のある“MARCH”と言われている学校群からは、まだかなり引き離されているということがわかってまいりました。名前が通るだけでは、受験界では許してもらえないということにもなるわけであります。このギャップを埋めるのは、校名のイメージよりも、実際に入りたくなるような教育研究を提供すること、これが非常に大事なポイントである、ということにもなってくるわけであります。二つ目はですね、クリスチャン学長として、キリスト教教育という建学の精神と“Do for Others”という教育理念の関係を知ってもらいたい、ということでもありました。これを、何よりも教職員、あるいは学生に説明しようとしたわけであります。東北学院でいえば宮城学院との間の関係、私どももフェリス女学院との間にあります。フェリスはですね、“For Others”という言葉を使って従来からその精神を表現していました。非常に似ているんじゃないか、“Do for Others”も“For Others”も似ているんじゃないかという指摘を受けたのでありますけれども、これは別にフェリスの後塵を拝したわけじゃなく、もともとヘボン塾という同じルーツから出てきているわけであります。新約聖書マタイの福音書第7章12節、アメリカの聖書協会が出している国際版聖書に、“Do for others what you want them to do for you”という言葉がある。そこから出てきているのだということを説明いたしました。イギリスで読まれている欽定訳聖書では、国際版“Do to others”という言葉で語られており、そんな強い言葉ではございません。しかし、“Do for others”すなわち「ために」が強調され、アメリカの聖書に由来ということになるわけであります。しかしながら、控えめはいいことばかりではありませんで、“Do for others”という言葉を使えば、あ、キリスト教学校の意味がよくわかりました、という人がずいぶん出てまいりました。これが究極の教育理念なんですね、というふうにも理解していただいたということでもあります。意地の悪い先生方からは、「世の為人の為」とどこが違うんだ、説明してほしいなどという議論も連合教授会でありましたけれども、これをどういうふうの説明したら学生たちや教職員と共有できるのかということに、心砕抱いた次第であります。

私もですね、松本先生と同じようにですね、歴史家でありますので、これについてはヘボンの事績まで遡りました。ヘボンという人が、ヘボン式ローマ字ということで世間では知られています。その人はですね、実は、ふつうの宣教師ではない。何かというと、“Medical

Missionary”であったという点に実はポイントがあるということがわかってきました。お医者さんだったんです。それで彼は医者なのに、医者なのという言葉には語弊がありますが、医学校を作ろうとはしませんでした。医学校を作れば、言葉は悪いですけども、お金も入ったでしょうと思うんですけども、そんなこともしませんでした。医学は、あくまでも人を助けるためのボランティア、他者とともに生きるための、いってみれば、ボランティアとして位置づけられまして、本業に力を注ぎました。本業は何かと申しますと、プリンストン出身のですね、インテリでありますから、どういうことを考えたかという、まずこの国の人々に聖書を読んでもらうためには言葉の理解が必要だ、コミュニケーションツールとして言葉が必要だ、ということで、辞典の編集にとりかかったわけであります。これいってみれば、患者さんからですね、言葉を聞く。ヘボンの作った辞典には“TSUNAMI”という言葉が掲載されているんですけども、これは現在世界語になってしまいました。「先生、黒くて大きな波がくるんです」と言われて、「それどのような、“TSUNAMI”っていうんだ」、「黒くて大きな波」って書いて、「7 mぐらい」と書いて、そんな風ですね、コミュニケーションしながら、いってみれば、辞典を書くわけであります。約 20,000 語の辞典を作っています。それも明治維新の前年にですね、出版されたということになるわけです。日本という国について外国が知ろうとするならばこの辞典を買うべし、ということで、各国大使館から引き合いがあって、ロンドンでもニューヨークでも発行されましたけれども、そういう形で日本を紹介するひとつの手段になっていくわけであります。ただ、それは、いってみれば、だれから仕入れたかといいますと、市井の民達でありまして、彼らは辞典の前文にですね、“living teacher”（生ける教師）から自分は習ったんで責任は彼らにはないということを公にいうことによって、ヘボンという人はコミュニケーションの能力の高い人だ、ということをお伝えわけであります。また、医療奉仕ということについては、TBS の開局記念番組に「JIN-仁」という番組がありました。原作は漫画だそうですが、南方先生という、幕末に突然現れまして、コレラを治すシーンがありましたけれども、それと同じようにですね、近代医学を使いながらヘボンも治したわけあります。「ヘボンさんでも草津の湯でも、恋の病は治りゃせまい」という言葉がありますけれども、そんな形で医療奉仕いたしました。

こういうことからですね、どういうことを言えるかということで、5 つほど、ヘボンを切り口に問題提起をしました。まず第一に、ヘボンの他者理解は、大変優れたものであった。第二に、分析力、構想力、第三にコミュニケーション能力、第四に“Do for others”の目的語に“what”を用いて何をしたいのか、というキャリア、ミッションを問うということになります。それから第五にですね、他者への貢献の言葉ではありますけれども、よく説明されているのは、学生なんてまだ他者への貢献ができないんじゃないの、何言ってんのと言われるわけですけども、誰のために、自分のためですか、人のためですか、というと、共に生きるためです、という説明するんですけども、「自分もしようとするのを他の人にもしなさい」ということで、共生力ということになるわけであります。これらのことがですね、他者を理

解できる人間とか、分析力、構想力、情報と語学とかですね、そういったコミュニケーション能力に富む人間とか、今いわれているキャリアデザインができる人間とか、あるいは共生社会、これはですね、人間同士だけではなく、あるいは自然、環境というような、そういった共生能力を持った人間といったことを考えたというふうになるわけでありませう。

ただですね、これ私こんなことをやったと言いたいんじゃないで、問題は、それがどれだけ教職員の間に浸透しているか、という点がポイントです。経営がうまくいかない学校というのは、大概は、上の人と下の人とは言葉が悪いですけども、上の上の考えを下の人が理解できないという学校が多いんですけども、やはりこの学校全体として何を掲げて、どこに向かっているのかということが明確でなければうまくいくはずがありませんので、建学の精神、教育理念、そしてまた教育目標というものは、三位一体というふうに理解している次第でございます。

それから今日は職員の方々もずいぶんいらっしゃっていますけれども、職員の能力ということについても考えました。これはですね、これまでの教育者としての経験上、こんなことが今問題になっているということを挙げました。何かというとですね、大学はこれまでのように、文系の大学は座学で十分だ、ということではなくなってきた。大学では工夫を凝らした教育機関として、多くの職員の手を借りて教育する機会が増えてきているということでもあります。とりわけ、“face to face”の重要性を強調するキリスト教大学においては、教員と職員が車輪のように両輪として協働して働かなければうまくいくわけではない、ということになります。例えば近年eラーニングということで、これが推奨されるわけでありませうけれども、教材のコンテンツの作成と成績評価は別として、日常的な管理はじゃあ誰がするんだ、学生の面倒を誰が見るんだ、ということにもなっています。それから教室を離れた実習授業、国内のみならず海外に出かける場合が多いですけども、誰がその手続きや助手を務めるのか、ということにもなっています。それからボランティアということについても、誰が指導するのか、ということにもなっています。増大しつつある障がいのある学生に対して誰が勉学のサポートするのか、ということにもなっています。体のハンディだけではなく、心の病をもつ学生も多くなっています。その学生が卒業して、社会に就職して、一人前になっていくためには学校は何をしななければならないのか、ということも考えていかなければなりません。これらの事柄は課題として、我々に突き付けられているといっても過言ではありません。また、入口と出口とでいえば、大学教員による高校の出張出前授業が薦められますけれども、時々若い先生からとんでもないところに行かされた、と聞かされるんです。これはですね、どこに竿を下せばあたるのか、といった判断は誰がするのか、ということにもなっています。またキャリア教育についても、助言・指導を誰がするのか、そんなことを考えればですね、いってみれば、大学の業務というのは年々増えるばかりです。マックス・ウェーバーは言ってますけれども、官僚制って肥大化するんだということでありませうけれども、こういうことに対して新しい業務のためにですね、職員の数を増やしていく

という対応方法もあるでしょうけども、そうすれば人件費が高騰し、まさにアメリカの大学ではありませんが、授業料が高騰して、大学は一部の金持ちしか入らない学校になってしまいます。また、コスト削減として外注するという手段もありますよということになるわけですから、アウトソーシングや非正規の雇用、派遣の方々をお願いするということになります。それはまた教育経験ってというのは、どういうふうに蓄積されるのか、という問題にもなってくるわけであります。職員の、まさに、教育力が求められている時代に私たちは突入しているのではないだろうか、ということになるわけでもあります。もちろん、職員の方々にはですね、管理部門、教育部門という大きな区別があります。財務・管財・人事・総務もプロとしてその仕事量の増大に専門化せざるを得ないという状況もわかります。しかし、果たして今述べたように教育部門を知らずに教員による新企画、教育プロジェクトの評価を管理部門が果たしてできるのか、という問題にもなってくるでしょう。私は、財務部長候補の職員に敢えて学長室の企画の仕事をしてもらいました。そのような経験値を持っている財務部長は、総じてお金がないからできません、とは言わないでほしいという狙いがここにはありました。その結果、「このプロジェクトをぜひ進めたいんだけどお金は無いんだよね」といったら、「先生それは何とかあります」と言ってくれたのです。「えっ、どういうふうになんとかなるの?」と聞いたら、「経常経費からは出ませんが、教育コンテストに参加してもらって、そこで賞をとってもらったらどうですか」。そういう風に教育部門で積んだ経験で答えてもらえると、私どもはありがたいということになるわけであります。また、職員の方もですね、いってみれば、専門化・分業化がもたらす弊害がありまして、これこういう笑い話があります。学生が窓口をたらいまわしにされたという話ですが、就職が決まるまで寝つけない、とうとう健康センターを訪ねたところ、就職の話が原因だからキャリアセンターへ行ってくれと言われて。キャリアセンターに行くと、心の病が原因なので学生相談センターへ行ってくれと言われて。学生相談センターへ行くと、今度は、不眠の問題なので健康センターへ行け。結局一回りしたということになったわけですが、キリスト教大学といいながら、人格教育といいながら、これではあまりにもひどいんじゃないの、という話しです。私達はこういったことについて責任を負っていかねばならないわけであります。なんとか、専門化あるいは組織の壁というものに風穴を開けたいというふうに考えてきましたので、創立 150 周年の際にですね、いってみれば、全学的な課題に取り組むためのですね、組織横断型プロジェクトチームを職員から募集いたしました。これかなり勇気のいることでありまして、勤務形態が乱れるというようなことを言われましたけれども、なんとか、学校全体を、教育というのを知ってもらいたいという願いから行ったプロジェクトであります。職員からプロジェクトを募集したところ、11 件出てまいりまして、そのうち 6 件を採択したんですけれども、例えばこんなプロジェクトが出てまいりました。「勤務員のキリスト教へのすすめ」。これについては毎回宗教部が言っているんじゃないの、という話になるんですけれども、これは若手職員の方から実は出てまいりまして、なんとかチャペルへ出席をし

ようというような呼びかけを改めて若手の方から伝えようとの企画でした。あるいは、「朝食付きへボン塾、朝稽古」。私は剣道、柔道の話か思ったのですがそうじゃなくて、内定をとった4年生が下級生と繋がる朝食会をします、ということでありまして、これはNHKの「おはよう日本」で取り上げられましたけれども、いってみれば、内定を取った4年生が下級生とつながり、朝食を食べてから就活に出るとかで、そういうある意味では役に立っているんじゃないかという話も出てまいりました。

そういうことをすることによってですね、職員の内輪につながり、職員が陥りがちな管理目的型の学生指導、あるいは組織偏重マニュアル型の思考回路、あるいは上司からの指示待ち型で責任意識の希薄な態度からの脱却を目的としたプロジェクトだったということでもあります。すなわち、管理する学生の立場を尊重する併走型の職員、あるいは組織偏重マニュアル型でなく多岐にわたる知識を有し、むしろ横断型に仕事に取り組める多能型の職員、もしくは指示待ち型ではなく自分の企画・調整・修正・演出できる教員が輩出してもらいたいという願いがこの中にあるわけでもあります。大学が創意工夫を凝らした教育機関であらんとする限り、車輪の両輪である職員の能力底上げが今後の大学を左右するといっても、わたしは過言ではないと思います。教職員組織の肥大化を招き、大学を特権階級のものとしないうために、外注による教育力の低下をもたらさないために、いまこそ職員の教育力を強化が求められているのではないかと思います。そのためには東北学院大学の教育理念である“3つのL”、そういったものを生かしながら、教育理念を一層明確にしていきたい。130周年を迎えた東北学院の教職員の方々に、期待する次第であります。いってみれば、東北学院の方から、よく「東北を日本のスコットランドに」、ということばを聞いたことがあります。そういった気概がある学校として、教職員力を合わせて130周年を迎え、思いを新たに、キリスト教学校として、歩まれることを祈念して、私からの講演とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

【 朝 拝 】

讃美歌：24 番

聖 書：新約聖書 ヨハネによる福音書 第 13 章 1 ～ 11 節

ガラテヤの信徒への手紙 第 2 章 6 節

説 教：『神に愛された人間』

讃美歌：139 番

原田 浩司 先生

「ヨハネによる福音書 第 13 章 1 ～ 11 節 」

弟子の手足をあらう

さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いのだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」

イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。

「ガラテヤの信徒への手紙 第 2 章 6 節 」

おもだった人たちからも強制されませんでした。この人たちがそもそもどんな人であったにせよ、それは、わたしにはどうでもよいことです。神は人を分け隔てなさいません。実際、そのおもだった人たちは、わたしにどんな義務も負わせませんでした。

『神に愛された人間』

大西 晴樹

皆さんおはようございます。昨日はつたない話を聞いてくださりましてありがとうございます。今朝はキリスト教会の牧師でもないわたくしがなぜか説教して欲しいということで、イエス・キリストの御言葉を取り次ぐことになりました。

私は東京中目黒にいます日本バプテスト連盟、恵泉バプテスト教会で教会生活を送っている信徒であります。教会の責任役員として牧師を支えています。神学校で学んだことはありません。バプテストという教会はもともと、平信徒説教運動からうまれてきたせいで信徒が説教をするというケースがしばしばあります。

たとえば東北大震災後、わたくしどもの恵泉バプテスト教会の小河義伸牧師が仙台バプテスト教会に急遽赴任することになりましたために無牧師状態(牧師のいない状態)が2年9か月間ありました。その間、月の半分を協力牧師の女性牧師が、残りの半分をわたくしども教会役員が代わるがわる説教し、その役割を果たしたことがありました。

また明治学院大学のチャペルでは各学期に白金、横浜キャンパスがありますが、一回づつ奉仕するので年間4回チャペルの奉仕もしております。また、年に2、3度、なぜかよその教会で説教することがありますので、キリスト教学のスタッフでもない、そしてまた牧師資格をもたないわたくしが、こうして皆様の前でキリストの福音をわかりやすくお伝えするというは大変おこがましいことですが、まずはご了承ください。

さて、わたしとキリスト教の出会いですが、わたしがイエス・キリストは救い主であると信仰告白をしてクリスチャンになったのは今から37年前、26歳のときです。

当時大学院の博士過程1年生でした。わたしは昨日話しましたが、北海道の深川出身で両親は仏教徒であり、お盆には寺に、新年は神棚に参る程度のごく平均的な宗教意識をもつ家庭で育ちました。

地元の高校を卒業して東京の大学に進学しました。わたしの高校時代はベトナム反戦運動、

学生運動の盛んな時期でした。一年生の時、東大入試が紛争により中止され、アメリカ軍によるベトナム戦争に反対する運動は、深夜ラジオ番組を通じて田舎の高校生の心にも響くものがありました。ベトナム反戦運動や学園紛争は、アメリカ軍がベトナムから撤退したこともあって、潮が引くように急速に衰えていきました。このような時代の変わり目に大学にいた私は、自分とは何か、また社会とは何かを考えたくなり読書サークルに入って政治学や経済学の古典を学ぶようになり、ついには大学院まで進学することになりました。大学院の指導教授は韓国の民主化運動の支援にとっても熱心な先生で、学生時代にあるていど冷めていた私にキリスト教とは何かを突き付けてきました。

というのはみなさんご承知のとおりお隣の国韓国はキリスト教が盛んで、パクチョンヒ大統領、今のパククネ大統領のお父さんですが、かの軍事独裁政権に反対して抵抗した人々の多くはクリスチャンだったからです。支援運動をしていた指導教授はこのキリスト教に影響され、私にせまってきたわけであります。

たとえばキムデジュンという大統領がそうですけども、パクチョンヒ大統領と対立候補であるために東京板橋のホテルから白昼堂々、大使館員やKCIA（韓国機密情報部）によって拉致される途中に日本海の海底に投げ込まれるのではないかという恐怖のもとで、神を本当に信じるようになったと話しています。キムデジュン氏によれば、拉致された時点で自分の存在は消されたと思ったそうです。目隠しをされて連れてかれて。日本海を渡る真っ黒な拉致船の船底で恐らく米軍機だと思うのですが、ブーン、ブーンとこの拉致船を牽制する飛行機の轟音を聞く中で、自分のことを忘れていない神様の存在に本当に気付いた、と言っております。私が驚いたのは、そのキムデジュン氏を初めとするクリスチャンたちが独裁政権に反対して幾度も幾度も逮捕されながらも決してくじけることなく、落ち込まないで民主化運動を担っている。というよりは、弾圧や迫害という逆境から力をつけて運動が広がっていく、そのような勇気と連帯は一体どこから来るのだということでした。

日本ですと、普通逮捕者が出ると逮捕されて、人は落ち込み、その後の人生を悲観して運動から離脱していきます。そして無常感、すなわち人間とはとるに足らない、はかなくちっぽけな、無きに等しい存在だという思いを抱き、できるだけ他人との交わりを避け、ひっそりと生きていくようになる。韓国のクリスチャンはそうではなかった、という点にカルチャーショックを受けました。確かに、韓国民主化運動は、長年の運動の中で、多くの命が奪われ、血が流されましたが、キムデジュンが大統領となり民主化運動が勝利した今の韓国は、お隣の国北朝鮮とは異なり、自由な国になりました。私は、政治犯であったクリスチャンが文字通り、「罪人」でありながらも、今日のテーマではありますが、イエス・キリストの愛によって赦され、今度は赦された喜びを持って生きていく、そのようなクリスチャンを目のあたりにして、違いは日韓の文化の相違にもあるよりも、イエス・キリストの愛を信じるか信じな

いかに違いが大きいのではないか、ということに気づくようになりました。それよりこれまでこれといった生き方をしてこなかった私ですけれども、イエスは救い主であり、希望であるということを告白して37年前クリスチャンとなったのです。その前の私は、クリスチャンはどこかおとなしく、禁酒禁煙など個人的な倫理主義を偏重しているというイメージがあったのですが、キリストの愛がそれまでに人間に勇気と連帯を与えるものだとは思ってもやらなかったのです。

実は日本のキリスト教史の中にも、そのような勇気溢れるエピソードがあります。それはこの東北学院の創設者の一人、押川方義にまつわるエピソードです。三大バンドとは、ご承知のように、クラークとその弟子たちの「札幌バンド」、内村鑑三とか新渡戸稲造という層々たる明治の文化人が出現しております。それから、二つ目はヘボンやブラウンら長老改革派宣教師による「横浜バンド」、そして震災で宣教師館が壊れましたけれどもジェーンズとその弟子たちの「熊本バンド」、ここからは将来同志社へ進む会衆派、日本では組合教会という教会を指導するリーダー達をたくさん生み出しました。

押川が属している横浜バンドは、教会的・聖書的な点にその特徴があると言われています。しかし、日本の私立学校の指導者になる人物を幾人か輩出しております。例えば、明治学院の井深樞之助、東京神学社(現：東京神学大学)の植村正久、青山学院大学の本多庸一、東北学院の押川方義はもちろんのこと、専修学校(現：専修大学)の駒井重格らがそうであります。

私がかつてイギリスを研究しているという縁で、『長老・改革教会来日宣教師辞典』(新教出版社・2003年)の執筆を担当していました。その中で、新潟の伝道を担ったパームというエディンバラ医療宣教会派遣の医療宣教師について書きました。ご承知の通り、新潟は日米通商条約による五港開港の一つですけれども、仏教王国でもあり伝道は困難を極めました。パームは新潟ではじめブラウンの出身の雨森信成(ラフカディオ・ハーンと仲のいい英文学者であります)を通訳として説教していました。ところが、パームが伝道した1976年(明治9年)頃の新潟市内に43カ寺を要して仏教王国の伝統を誇っていた新潟の宗教界は、黙ってパームの説教を聞いたわけではありませんでした。仏教勢力の集会妨害・暴行につきまわられたのです。当時のキリスト教側の資料はこう記しています。「聴衆の半分は敵意をもつ坊主であって、この説教に罵言を浴びせたり、また無知な質問を発したり、ときには腕をまくって説教者に向かってくる等で、その騒動は全市殺気立つありさまだった。パーム先生は身長六尺あまりもある大男で、いざとなれば非常に力のある人で、氏を無理にとりもどすことができたが、しかしこのこと(説教中に通訳できる日本人が拉致されたこと)、それ以来雨之森氏は非常に恐怖してついに説教壇上にたたず、まもなく横浜に帰ることになった」と述べています。通訳を失ったパームは横浜のブラウンに雨森の代役任命の依頼をだします。ブラウン塾の塾生の多くが躊躇するなか、「しからば吾輩が行くべし」と、みずから買ってでたのは伊

予松山出身の押川方義だったのです。危険をおして押川が新潟にむかったからとて、状況は改善されたわけではありませんでした。押川の熱弁や激しい説教は、ついには押川と似た県庁の職員が惨殺されるという事件を引き起こしました。しかしながら押川が到着した1877年12月から日曜礼拝が新潟で行われるようになり、翌年6月(半年の間に)までに5人がパームよりバプティスマを受け、新潟にキリスト教が根付くようになったのです。

東北学院の100年史には、押川は新潟のパームを助ける任を受けて赴任したが、1880年の大火を機に同労者の吉田亀太郎の故郷の東北に転ずることとしたと述べられています。

そして仙台教会を設立し、これからは、みなさんがご承知のように、ホーイと一緒に1886年(130年前)に東北学院の前身である仙台神学校を発足させました。

歴史に“たられば”という言葉は禁物ですが、もし押川があその時に危険をかえりみずに、「しからば我輩が行くべし」と自ら買ってでなかつたら、吉田との出会いはなく、仙台の東北学院もなかったと思います。

押川の信仰、いや、押川に臨んだイエスの愛が歴史を動かしたエピソードだといえましょう。

今日の説教のテーマは「神に愛された人間」という題名ですが、ギリシャ語で愛という言葉の意味する言葉は4つあるといわれています。ひとつはアガペー、イエスが十字架にかかることによって無償で人間の罪を贖ってくださった崇高で献身的な愛がそれです。それからおもに性愛を意味しますがエロス、それから隣人愛を意味するフィリア、そして親子の愛のストルゲーという4つの言葉があります。

なかでもイエスがしめしたアガペーは、長年に渡ってキリスト教が迫害され、禁止されてきた日本人にとってはなかなか理解できるものではありません。事実、明治学院を創設したヘボンが日本で最初の本格的な英和辞典『和英語林集成』を明治維新の前年に編集・出版しました。その辞典の初版には残念ながら「愛」という言葉が欠落しています。おそらく、日本人にとって、「愛」というと井原西鶴の好色一代男ではありませんが、性愛エロスのイメージをもつのでヘボンはあえて避けたのだと思います。この事典の第二版、これは私も確認しましたけれども「愛」がありました。この「愛」はこう訳されています。「慈しみあう」という仏教語で訳されていたわけでありませぬ。

先ほど読んでいただいた聖書の箇所「ヨハネによる福音書」第13章1～11節は洗足物語といわれている箇所です。イエスが弟子たちの足を洗う物語はヨハネ書だけに記され

ており、他のマタイやマルコ、ルカの福音書では最後の晩餐に当たる場面であります。当時は、舗装もされていない道路で、人々はサンダル履きで歩いていくと自ずから足は汚れるわけでありまして、そこで、建物にはいって食事をするさいに足を洗おうということになります。我々は昨日おいしいごちそうにあずかりましたけれども、仙台から歩いてきて、足湯に入ってくださいということであって、むしろ松本先生が前にでて、皆さんの足を洗う、こういったことかもしれません。そういうかたちで、この物語は進行してまいります。どういふことかといいますと、イエスが弟子たちの足を洗うということは、非常に特異なことがらであったという風に考えることができます。その理由づけは聖書に記されていますけれど、こういうことではありますが、この世から父のもとに移る自分の時が来たということを悟っていると。イエスは十字架の上で子羊のように殺されたけれども、それはまた同時に永遠の存在であり、神、すなわち、主のもとに自分が帰ることだということを悟っていた、ということでもあります。この世から神のもとへ超越する、そのために自分の使命を果たすべき時が来ているということだと思います。世にいる弟子たちを愛し、このうえなく愛し抜かれたと述べられています。ここでは日本語表現としては上手ではありませんが愛という言葉が2度重ねられて用いられています。すなわち、最後までという時間とご自身の犠牲により人間を救うという目的の両方を達成されたという意味において「愛して愛し抜かれた」と二つの愛が使われているのかもしれません。

他の聖書の訳では、「愛し抜かれた」という言葉を「愛を完成された」と訳しております。ところがです。愛は常にそうなのかもしれませんが、愛したイエスと、愛された弟子の間にはあきらかにズレがありました。ヨハネによる福音書1章の11節には、「言は、自分の民のところに来たが、民は受け入れなかった」と書いてあるとおりです。「言」とはイエスのことですが、それでもイエスはルカによる福音書における十字架上の言葉で、最後の言葉にこう述べています。「父よ彼らをお許しください。自分が何をしているのか知らないのです。」格調高い文語訳では「父よ彼らを許したまえ、その為すところを知らざればなり」、と述べているわけであります。

イエスの弟子といえども、いつもイエスの方を向いており、イエスを愛しており、イエスに対する忠実を死に至るまで貫いた人のことではありませんでした。それでもなお、イエスは人間を愛された。すなわち、イエスを受け入れなかった者たちをこのうえなく愛していた、それが主イエスの救いであるところの福音書はいうのです。

2節を読みますと、ユダの裏切りについて述べられています。その裏切りは「悪魔の示唆」によるものだということでもあります。しかし、イエスは自分が愛する弟子のひとりに裏切られることを承知のうえで、その極みまで愛し抜かれたのです。父のもとへ帰るためにご自身が死を覚悟する。その死はどこから起こるかといいますと、自分の弟子に裏切られるという

ことに原因するわけです。人間は悪魔の虜になっているとイエスは見ておられる。ユダはまったく例外的な存在ではない。私はユダの足を洗った。ペトロの足を洗った。そして注目したいのは、そのペトロの裏切りについてのイエスの予言でもって、この章が終わるということです。

聖書を持っている方は 13 章最後の部分を読んでいただきたいのですが、有名な三度の否認の物語であります。

「あなたのためなら命を捨てます」というペトロに対して、イエスはあなたも鶏が三度鳴く前に、私を否定すると言われたのです。

皆様ご存じのとおり、ペトロの否認はヨハネ福音書には第 18 章に刻銘にしるされております。イエスが大祭司の屋敷につれていかれたとき、イエスの弟子のひとりではないかと問われる度に、それを 3 度も打ち消したという有名な話があります。私はこのお調子者のペトロをみていると、どうも自分自身を見ているような感じがいたします。多くの人は自分の命が危険にさらされると平気で他人を裏切るのではないのでしょうか。たとえ危機に陥らなくても、私たち普通の人間がとんでもない罪を犯すということをよく目撃します。某大手電機メーカーの粉飾決算、某有名ハウスメーカー子会社のマンション杭工事の不正問題、数えあげればきりがありません。これらの当事者たちは普段そんなことをするような人とは決して思えない人々なんです。人間の豹変を言い表す言葉として、昔の中国の学者たちは、はじめから人間と機械は異なるはずなのに、人間のことを機械、機という字で言い表していました。人間は機だというわけであります。

機とはもともと弓の装置で、矢を放つ仕掛けのこと、これが機でありました。これがのちにきっかけとか、からくりということの意味するようになったといわれています。

つまり、人間とはどのような力が関わるか、その力次第でいかようにもなる、不安定な存在ということの意味しているのであります。そのような弟子たちにたいしてイエスは突然立ち上がり腰に手ぬぐいをまとい弟子たちの足を洗い始めたのです。当時のユダヤ社会では妻が夫に、子どもが親におこなう場合がありますけれども、奴隷が主人に対して行う仕事でした。また通常、食事の前におこなうべきものでした。

奴隷の仕事といっても、異邦人の奴隷がすることで、ユダヤ人の血筋をもつ奴隷の仕事ではありませんでした。それほど卑しむべき仕事としてとらえられていたわけであります。

しかし、同時に愛の仕事でもありました。自分で汚したんだから自分で洗えばいいということではなく、愛する者の足が汚れているのを見るのは耐えられないので、勝手に洗えというのではなく、イエスは跪いて、一人づつ弟子たちの足を洗ってあげたのです。イエスの行為に戸惑った弟子たちの気持ちをペトロは代弁しています。8 節をご覧ください。ペトロは

洗足を拒みます。私の足を決して洗わないでください。9節でイエスが「私となんのかかわりもないことになる」と答えました。そうするとペトロは手のひらを返したように、主よ足だけでなく、手も足もと欲張るのです。これもまた人間の自己愛を表現しているのではないのでしょうか。主従の関係の逆転に驚き、一見謙遜を装いながらも、本当はイエスに愛の施しをしてもらうことしか考えていないペトロの、ここに人間の罪をみることができるし、どこか自分に似たペトロを感じるすることができます。これに対してイエスは10節において「既に体を洗ったものは全身清いのだが、みんなが清いわけではない」とはっきり述べています。弟子たちに裏切られることがわかっていてもイエスは身を低くしてユダやペトロを含む弟子たち全員の足を洗ったのです。私はここにアガペーといわれている崇高で献身的なイエスの愛の神髄をみることができると思います。イエスのそのような愛があるからこそ、私のようなお調子もので欲が深く、多くの過ちを犯す者もこの愛のもとで赦されています。イエスが罪人をも愛してくださっているから私はイエスの愛によって赦されて生きることができるのです。

どんなに罪深いものであっても、どんなに背いている者であっても、その意味ではユダでさえもなお、イエスの愛を受けた者であると教えることが許されているのではないのでしょうか。まさにそれ故に、私も愛し抜かれているという信仰を毎日改めて告白することが許されているのではないのでしょうか。「私の足など洗わないでください」もったいないといいながらも、他方で三度イエスを知らないといった気の弱いペトロはこのイエスの愛をわかったからこそ伝道者になり、殉教者にさえなったということでもあります。私は過去、民主化運動を担ったクリスチャン達が罪人は赦されると言って何度も投獄されながら正義を貫いていったあの不屈の精神はどこに由来するのか、また、押川が恐怖の中で「しからは吾輩が行くべし」と言って新潟にきた、その気概は一体なにに由来するのか、ということを考えてみたいわけでもありますし、またこれがイエスの愛のおかげであるということもできるわけでもあります。

ヨハネ第1の手紙第4章10節の言葉、私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛して、私たちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛がありますと書いてあるとおりであります。間違っってはならないのは、私たちがイエスを愛したから救われるのではなくて、私たち人間がイエスキリストによって愛されたからこそ救われるという曲げてはならない真実なのであります。

教育、特に私たちが従事している高等教育は、専門教育を授けることによってその専門性を高め、ますますその分野に秀でた学生を育てることを目的としたものです。しかし最近、高等教育のコストが高くなるにつれていわれることは、高等教育がますます人間の差別、選別、格差拡大の機会となっているのではないかとあります。アメリカの大統領選

挙における民主党のサンダース候補の公約はまさにこの点にありました。私は先ほどガラテヤ信徒への手紙 2 章 6 節を読んでもらいました。そこはエルサレム会議の様子が描かれており、パウロのようにギリシャ語を話すユダヤ人。ヘレニストが、ペトロのように割礼を受けたユダヤ人、ヘブライニストだけに伝道する路線を乗り越えて、割礼をうけていない異邦人にも伝道してよいとの取り決めがなされたことが記されています。ユダヤ教の分派としてのキリスト教から、世界宗教としてのキリスト教への発展の経緯がそこにあります。その合言葉は「神は人を分け隔てなさない」という言葉があります。これを英語で表現すると“God is no respecter of persons”ということになります。

実は私は才能教育、専門教育がもたらす問題を解決し、私たちの教育が真に人間教育に向かうきっかけがこの言葉にあると考えています。これはユダヤにもペトロにも示されたイエスの洗足のような普遍的な愛でもあります。

すなわち唯一の神である大文字の God は人をリスペクトする、すなわち尊敬するとか重んじるというんですけども、ノーリスペクトですから、重んじない。何を重んじないかというパーソンズを重んじない、すなわち人を重んじないということになります。えっ、キリスト教の考えは人間を重んじないのか、ということになり、それで人格教育ができるのかと疑問に思われる方も多いのではないのでしょうか。“God is no respecter of persons” とは、人の如何にかかわらず重んじないということであるわけであります。

実はパーソンの語源であるラテン語のペルソナは仮面という意味があります。昨日鈴木先生が仮面の話をしておられましたけれど、いってみればそれともう一つ、神に作られた人間という意味でつかわれるラテン語にはホモ、すなわち男も女も含めてマンという英語の言葉を皆さんは知っていると思います。人を表しながら、パーソンとマンでは意味が異なります。

すなわち、神は仮面をかぶった人間を重んじない、リスペクトしないということがこの“God is no respecter of persons”ということの意味であります。神の下における平等という意味がそこにあるんだとわたくしは思います。イエスの愛、すなわち慈しみと公正とは万人に等しく示されているわけでありまして、さきほどの洗足のところでもありましたけれど、あの人は牧師だから神に愛されているとか、あの人は信徒だから神に愛されていない、あの学生は成績がいいから神に愛されて、成績が悪いから愛されていないということでは一切ございません。

ガラテヤ章 2 章 6 節が意味しているのは「神は人間を人を分け隔てすることなく神は人を愛される」という神の本質を物語っており、ローマ書 3 章 1 節にあるように「義人なし、一人だになし」という神のもとにおける人間の本質を物語っているのであります。

「神は人を分け隔てなさない」という言葉をどのように理解したらいいのでしょうか。これはですね、ジャン・カルヴァンという 16 世紀ジュネーブの宗教改革者が、神を重んじな

い仮面をかぶったペルソナについてこう述べています。「人間にあって目で認められ、あるいは愛、好意、威厳をもたらす、あるいは憎悪、軽蔑、不名誉をおこさせた自分を常とするものである。たとえば富や財宝、権力、高貴な身分、官職、領土、姿の美しさ、及びその他この類のものである」。人間は神と異なり、権力(これは濫用を伴うかもしれない)、富、(これは不正を伴うかもしれない)、領土(これは戦争を伴うかもしれない)を巡って相争うわけがあります。尖閣をめぐる領土の争いが、戦争、人間に死をもたらしめるんです。また普段の生活においても人間は、親子、夫婦、兄弟姉妹、嫁と姑、男と女、友人同士、同僚同士、上司と部下、教師と生徒、教師同士、生徒同士、売主と買主、等々の人々の間で、人間は、あの人はこうだ、あの人はああだ、と言って平気で人を傷つけ、自分だけが正しいと主張しあう、そのようなものでもあります。

私は学長在任中にいわゆる駆け込み寺である人権委員会を、セクシャルハラスメントだけを扱う委員会から、パワーハラ(パワーハラスメント)や、マタハラ(マタニティハラスメント)を扱う委員会に改組しました。その時皆さんはたいへん喜んでくれました。明治学院大学には、専任教職員 500 人、学生 12,000 人がおりますので、キリスト教学校といえども人間の社会である以上、憎悪、軽蔑、不名誉はたえずつきまとい、解決方法がなければ、争いはエスカレートし、教職員、学生の人権を守ることすらできなくなるという始末であります。

私たちが生きているこの世は慈しみ深くもなく、公正でもない社会です。では私たちはどうしたらいいと聖書は述べているのでしょうか。まず大切なことはバプテスマ、洗礼です。

誤解しないでもらいたいのですが、神が万人を愛されたからといって、私たちは聖書も読まず、祈りもせず、教会にも出席せずという、そんな不遜な態度でいいとイエスは言っているわけでは決してありません。本日の聖書の箇所においてペトロは 9 章で、「では手を、頭を」、と言ったのに対してイエスは 10 節において、「既に体を洗った者は全身清いのだから、足だけ洗えばよい」と答えています。

私事ですが私はキリスト教学校教育同盟の教育研究委員をしていたとき、実はこのホテルにもおそらく来たことがあると思いますけれど、もう 30 年以上前のことは忘れてしまいましたけれど、東北学院大学からは土戸清という先生が同じ委員を務めていらっしゃいました。その土戸先生はある聖書解説書のなかで、この「足だけ洗えばいい」という言葉を「バプテスマ」のことを意味しているのではないかと触れています。すなわちイエス・キリストが救い主であると告白してバプテスマをうけクリスチャンになったものは、神から全身の愛をただ求めるのではなく、バプテスマによって罪が赦され、神の恵みと祝福のもとにそれぞれの業へと励まなければならないともいっているのです。

さらに、今日の聖書の箇所が少しはずれますけれど、14節では、「ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗わなければならない」といって、あなたがたも互いに足を洗うということをお勧めしています。

これは、教会に出席して互いに仕え合うことによって初めて出来ることでもあります。

教会というところは、単にイエスの愛に宣べ伝えるだけではなく、互いに交わりと奉仕の場所であり、そこで「神に愛された人間」の姿が次第にわかっていくという場所ではないかと私は考えています。

祈ります。

イエスの愛は崇高な愛として、人間の罪を容赦なく映し出すとともに、人間がこの世では互いに仮面をかぶり、お互いに隔ての垣根をより高くするために争いあい、あなたの愛に背いていることを見ぬいておられます。私たちは高等教育に従事しているからこそ、キリスト教教育が格差を拡大するためのものであってはならないことを覚える者であります。神は仮面をつけた人間ペルソナを重んじられません。私たちは互いに仮面を取り去り、神の愛を覗き見ることができる「神に愛された人間」であることを思い知らせてください。東北学院大学の教員研修会を通して、イエスの愛、アガペーを知ることによって、あなたからの教育の核心にある重要な教えを教職員と学生が分かち合える機会となりますようにあなたが導いてください。主イエスキリストの御名に通じて祈りを捧げます。アーメン。

全体懇談

「東北学院のステンドグラス」
—異物としての東北学院礼拝堂—

大学宗教主任 鐸木道剛 先生

「異物としての東北学院礼拝堂 ―土着と超越―」

大学宗教主任 鐸木道剛

<ヒートン・バトラー・アンド・バイン工房1932年制作の「昇天」ステンドグラス>

東北学院ラーハウザー記念礼拝堂は、1932年に献堂されたネオ・ゴシック様式の礼拝堂です【図1】。礼拝堂の中に入ると、奥の正面に「キリスト昇天」を描いたステンドグラスがあります【図2】。

2016年の春に、このステンドグラスがヴィクトリア朝のゴシック・リヴァイヴァルの指導的役割を果たしたヒートン・バトラー&バイン工房の作品であることが判明しました【図3】。ステンドグラスの左の下端に工房の銘とロンドンとの記載があることが確認されたからです。何か工房のサインらしきものがあるとは聞いていましたが、実際にそのサインを確認し、インターネットで検索すると、すぐさま工房の情報が入手できました。初めに記しました「ヴィクトリア朝のステンドグラス復興の指導的工房」というのは、ウィキペディアにも記されているくらいで、イギリスでは常識のようです。

しかしそもそも東北学院は1886年設立の仙台神学校から始まる福音派(プロテスタント)の宣教師によって設立された大学です。創立者は、アメリカからのオランダ改革派宣教師バラー (James Hamilton Ballagh 1832-1920)から横浜で受洗した押川方義(1852-1928)、そしてアメリカのドイツ改革派の教会から派遣されてきたホーイ(William Edwin Hoy 1858-1927)とシュネーダー (David Bowman Schneder 1857-1938)です。3人ともにプロテスタントです。だから、そこにネオ・ゴシックの礼拝堂が、そしてゴシックに成立したステンドグラス(典型的なカトリック芸術で、イギリスでは16世紀の宗教改革と17世紀の清教徒革命のときに多くが破壊された)があるのはなぜでしょうか？

これは19世紀以来の中世復興あるいは中世主義(Medievalism)の産物です。18世紀イギリスのゴシック・リヴァイヴァルに始まり、19世紀ではジョン・ヘンリー・ニューマン(John Henry Newman 1801-90)を筆頭とする教会におけるカトリック復興と中世研究の始まりのオクスフォード運動、教会における典礼の再評価に連動してのステンドグラス復興、ラスキン(John Ruskin 1819-1900)そしてモリス(William Morris 1834-96)に始まる中世的手仕事の復活をいうアーツ・アンド・クラフツ運動、ルネサンス以来のアカデミズムを否定しラファ

エロ以前の中世に帰ることを目指すラファエロ前派の絵画、そして西洋近代を否定するジャポニスム、これらはすべて中世主義として軌を一にするものです。本学のラーハウザー記念礼拝堂のチューダー・アーチ(幅広で平たい尖頭アーチ)¹を特徴とするカレッジ・ゴシック様式(Collegiate Gothic)も、ステンドグラスも、1931年にシュネーダー院長が横浜在住のアメリカ人建築家のモルガン(Jay Herbert Morgan 1868-1937)²に依頼したものであり、シュネーダー院長自身のなかに中世主義があったと考えられます。具体的には未調査ですが、おそらくシュネーダー院長の思想と行動は、ステンドグラスが敵性文化としてパネルで覆われ見えなくされていた太平洋戦争中も首尾一貫していたと思われます。シュネーダー院長が復活させ、イギリスにステンドグラスを注文するに至った中世主義とは何でしょうか？

<中世主義>

西洋における中世とは近代の淵源です。12世紀ルネサンスといわれ、近代の発祥は14世紀イタリア・ルネサンスではなくて、12世紀フランスのゴシックであるとはハスキンス(Charles Homer Haskins 1870-1937)によって言われて久しいことです。ゴシックの文化とは徹底した物質主義です。物質で永遠を目指します。1144年にサンドニ修道院の聖堂建築でゴシック様式を誕生させたサンドニ修道院の院長シュジェール(Suger 1081-1151)は「技術は物質を超え(materiam superabat opus)」、そして「物質的なものから非物質的なものへ移す(de materialibus ad immaterialia transferendo)」と書いています³。12世紀以来のゴシックの大聖堂を復活した19世紀のネオ・ゴシックの建築ももちろん同じ物質主義です。たとえば観光地のロンドンのビッグベン、これはオーガスタス・ピュジン(Augustus Pugin 1812-52)設計で1859年に完成した19世紀ゴシック復興の最も有名な例でしょうが、それを目の当たりにするとその圧倒的な物質の追求に感動します【図5】。単なる観光地だからと馬鹿にしてはいけません。同種の感動はニューヨークのいわゆる摩天楼にもあります。1940年完成のロックフェラーセンターの建築などが挙げられます【図6】。このゴシックの物質主義には、世界を神の被造物、生命のない「もの」とみて、それを永遠と結び付ける新約思想が基礎にあります。それをオーストリアの美術史の泰斗ゼードルマイヤ(Hans Sedlmayr 1896-1984)は「ゴシックのカテドラル(大聖堂)ではすべてが見せるためであり、それはさほど重要ではない細部にまで徹底している(Wie sehr in der Kathedrale alles von der "Schau" bestimmt ist, zeigt noch eine verhältnismäßig untergeordnete Eigenheit)」と記しています(『大聖堂の生成』中央公論美術出版、1995年)⁴。

1 チューダー・アーチは、例えばケンブリッジのキングズ・カレッジの礼拝堂(1515年献堂)が最も有名なものとして挙げられよう【図4】

2 モルガンについては、水沼淑子『ジェイ・H・モーガン』関東学院大学出版会、2009年

3 Panofsky, *Abbot Suger on the Abbey Church of St-Denis and its art treasures*, Princeton, 1979, p. 62

4 Hans Sedlmayr, *Die Entstehung der Kathedrale*, Graz, 1976, S. 40.

個人的な経験ですが、始めてヨーロッパ旅行をした1975年の春、ちょうど聖金曜日からしばらくローマにいました。コロッセオでの教皇パウロ6世の苦難に満ちたVia Crucisの礼拝に続いて、復活日の前夜の礼拝にも、確か列に並んでサンピエトロ大聖堂に入って参加しました。ただしぼくはカトリックではなく聖公会でしたので遠慮がちにですが、しかしパウロ6世のお姿はよく見えました。ミサの順序などは聖公会と同じですからわかります。しかし、そこで聖変化のときに、教皇がパンを挙げた瞬間に予想もしなかったことが起こりました。一斉にシャッターが切られたのです。それも四方八方から立て続けにストロボが光っての写真撮影です。「これはわが体なり(Hoc est corpus meum)」(マタイ26:26)の言葉で、文字通り、パンはイエスの体に変化(transsubstantiatio)するのですが、それだけではなくて、イエスである神が見えるようになった瞬間です。そのことの重要性がはっきりわかりました。日本の、ぼくが知っている礼拝ではその瞬間が重要であることは鈴を鳴らしたりしてお知らせしますが(ぼくもサーバーをやっていたから、鳴らしました)、一番神聖な瞬間には、信者さんは内面に沈潜し、聖堂正面の祭壇は見えていません。神が見えるということがキリスト教の重要なポイントであることを理解しました。

そもそも見るということは、対象を「もの」として扱うことを意味していることは、コプトの聖シュヌート(348-465/6)の『キリスト教徒の振るまいについて』⁵のなかに「目は見るものを所有する(What the eye sees, it appropriates)」とあるように中世から言明されているし、身近ではロラン・バルト(Roland Barthes 1915-80)の言葉「写真は主体をオブジェに変えた。それもいわば博物館にあるようなオブジェに変えた(La Photographie transformait le sujet en objet, et même, si l'on peut dire, en objet de musée)」⁶を挙げておきます。神が見えるようになった、つまり神は「もの」となったとはどういうことでしょうか？これはまず旧約聖書がエジプトのアニミズムを否定する物質観を踏まえています。

<中世の物質主義の起源>

『知恵の書』に言います。「命のないものに望みをかける人々は惨めだ。彼らは、人の手で造られたものを神々と呼ぶ」(13章10節)、「何の役にも立たないねじ曲がった、節目だらけの木片を注意深く彫って造りあげた木像は、自分では何もできず、像にすぎないので、魂がない」(13章13-17節)、また「愚か者は、魂の欠けた、命のない肖像にあこがれる」(15章5節)とも書きます。また詩編にもこう書かれています。「国々の偶像は金銀にすぎず、人間の手が造ったもの。口があっても話せず、目があっても見えない。耳があっても聞こえず、鼻があってもかぐことができない。手があってもつかめず、足があっても歩けず、喉があっても声を出せない」(115篇4-7節)

⁵ Pseudo-Shenoute, On Christian Behaviour, XL,5, transl. by K.H.Kuhn, Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium, Scriptorum Coptici, Tomus 30, Louvain, 1960, p.55

⁶ ロラン・バルト『明るい部屋』(原著1980年)みすず書房、1985年、22頁

これは多神教の否定で、モーセに啓示された「十戒」にいう「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない」(『出エジプト記』20章4-5節)は、像を作ると拜んでしまうから、最初から作るなど言っているのであり、第一戒の「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」(20章3節)に帰結します。作っても拝まなければ、作っても構わない。これがビザンティン帝国におけるイコノクラスムの終焉、そしてマケドニア朝以来のビザンティン美術の黄金時代を生む背後にあるイデオロギーでした。

しかし物質を拜む(latreia)のではなく尊重する(proskynesis)根拠は、受肉論によって与えられます。神がイエス、つまり人また被造物の「もの」となったことから、イエスを介して、命のない空しい「もの」の世界と神の世界がつながりました。「もの」を通して神に至ることが可能となったのです。

<アニミスティクな物質観>

このようなキリスト教の物質観に対して、われわれは、いわばモーセ以前、すなわちエジプト段階のアニミスティクな物質観のなかで生きています⁷。アニミスティク、すなわちタイラー(Edward Burnett Tylor 1832-1917)のいう、「もの」に「霊・精神(spirit)」を認める、本来なら「精神主義(spiritualism)」と名付けるべき感受性です。つまり「もの」が生きている、「もの」に意識があるという感覚です。我々には人形供養は当たり前ですし、人の形をしていない針や筆も供養します【図7】。上野の不忍池の弁天堂の周辺には多くの供養碑があります。それは庖丁塚、扇塚、いと塚、そしてもちろん鳥塚、魚塚です。河豚やスッポン供養は別個にあります。眼鏡の供養もしています。その際、よく引用されるのが室町時代の『付喪神絵巻』の次の一節です。「器物百年を経て、化して精霊を得てより、人の心を誑かす。これを付喪神と号す」。これは三島由紀夫(1925-70)も『金閣寺』(1956)のなかで早くも引用しています。

恐山に行くと(恐山でなくても、どこでも同じですが)、すべてに命が宿っているように思えます。吊るされた布片には命が宿り【図8】、石の地蔵にも寒いだろうからタオルが巻かれ、前掛けが付けられています【図9】。しかしこういうアニミスティクな感受性は人類に普遍なものです。ロシアのキリスト教はビザンティン帝国から受け継いだものですが、ロシアでも石の十字架にはやはりタオルが巻かれているようなことがあります【図10】。恐山では人形は単なるものではなく、死者の魂を受け継いで、独り身で亡くなった死者は死後に人形と婚姻します(花嫁人形)。遠野のオシラサマはとても単なる木片とは思えません【図11】。既に観光地になっていて入場料を取って見せるような場においても同じです。また道ばたの地蔵を、

⁷ 吉本隆明のいう「アフリカの段階」にも同じ意図がある意味と解する。吉本隆明『アフリカの段階について:史観の拡張』春秋社、1998年

誰が地蔵を表象した彫刻と思うのでしょうか。つまりモデルの地蔵があって、それぞれの地蔵はモデルの地蔵を造形したものと思うのでしょうか。地蔵はそれぞれが地蔵のオリジナルであって生きているのです。石の彫刻ではありません。

仏教はそういう感受性を否定しません。『日本霊異記』(8-9世紀)には次のように記されています。「木是无心、何而出声。唯聖靈示。更不應疑也(木は是れ心無し、何にして声を出さむ。唯し聖靈の示したまへらくのみ。更に疑ふべからず)」⁸。仏像は単なる木である、あるいは絵でしかない、つまり意識のない(insentientな)「もの」でしかないことは判っている。しかしそれが声を出すことを認めているのです。これはその直前の唐時代初期の慧沼(648-714年)の『十一面神呪心経義疏』に記された「問木是无心。何故動而出聲耶。答此有三義故動而出聲也。一者行人心誠。二願強盛故。三菩薩願重故也(木はこれ心無し。何の故にか声を出だすや。…行人の心の誠なること、…行人の誓願の強盛なること、…菩薩の誓願の重いこと)」⁹を踏まえていると思われます。さらに下って鎌倉時代の明恵(1173-1232年)も、生身仏について次のように記します。「木に刻み絵に書きたるを生身と思えば、やがて生身に有るなり」¹⁰。これも仏像や仏画が木や紙であることはわかっている、しかし生きていると思えば、生きているのです。

人の形をしたものを人とみること、すなわちオリジナルとコピーを区別しないこと¹¹、さらにはものに命を認めることは主客の区別のない子供の感受性で、人間には自然で、自然であるからどの文化の人間にも見られる普遍的な感受性です。フロイト(Sigmund Freud 1856-1939)はそういう感受性を大人(すなわち近代人)から見て「慣れ親しんだ不気味なもの(das Unheimliche das Heimliche-Heimische)」と書き¹²、アンドレ・ブルトン(André Breton 1896-1966)も大人(近代人)の観点から「私はそれこそが世にも豊かなものと考えている。〈真の人生〉にいちばん近いものは、たぶん幼年時代である(…que je tiens pour le plus fécond qui existe. C'est peut-être l'enfance qui approche le plus de la <vraie vie>)」と書いています¹³。

＜土着的アニミズムを超越的に否定したのちに肯定する＞

「もの」に命が宿ることは愛おしいことです。しかしやはり恐怖の対象です。ローマ時代の哲学者ルクレティウス(Lucretius c. 99-c. 55BC)は、『事物の本性について(De rerum natura)』のなかで、「もの」と「もの」の像とは同じでないことを言い、魔術を否定します。「物

8 『日本霊異記』(中26)、日本古典文学全集、第6巻、小学館、1975年、216頁

9 『大正新脩大蔵経』第39巻1010頁

10 明恵『梅尾明恵上人遺訓』 岩波文庫『明恵上人集』1981年、211頁

11 これは民族学研究のバイオニアのフレイザー (James Frazer 1854 - 1941)のいう「類似の法則(Law of Similarity)」による「模倣の魔術(Imitative Magic)」である。フレイザー『金枝篇(一)』岩波文庫、1966年、57頁

12 フロイト「不気味なもの」(藤野寛訳)『フロイト全集 17』岩波書店、2006年、45頁

13 ブルトン『シュールレアリスム宣言(Manifeste du Surréalisme)』1924年(邦訳、岩波文庫、1992年、71-72頁)

の像(*rerum simulacra*)とよばれるものが存在し、…それは物の表面から引きはがされた膜のように空気の中を、あちらこちらに飛びまわっている。…私たちが目を覚ましていながら、また眠りの中で、…私たちの心を恐れさせ、また疲れて眠っている私たちをしばしば恐怖で驚き目ざませる。」しかし「いかに鈍い心にも、次のことはわかるだろう。物の像(*rerum effigias*)および希薄な形は、その表面からその物によって放出されているのだ」と続けます。つまり像を怖れることはないと言います¹⁴。それがルネサンスの合理主義の淵源になったとはグリーンブラット(*Stephen Greenblatt 1943-*)の説です¹⁵。しかし多神教のなかでは、アニミスティクな感受性が否定しきれません。ユダヤ・キリスト教の超越的な上からの命令が必要なのです。それは人間の動物としての本能の否定であり、人間性の否定でもあります。しかし内村鑑三(1861-1930)も自伝に記すように¹⁶、アニミズムの否定である一神教はどれほどの開放感と喜びと自由を与えてくれるでしょうか。そして被造物である物質世界は肯定されます。すこし長くなりますが、内村鑑三の信仰告白を引用しましょう。

「宇宙には一つの神があるだけである。以前に信じていたように多数一八百万以上一でないことを余は教えられた。基督教的唯一神教は余のすべての迷信の根に斧をおろした。余が為していたすべての誓い、怒れる神々を宥めようとして余が試みつつあった種々雑多の礼拝形式は、この一つの神を認めることによって今や不用とすることができた、そして余の理性は良心とは唱和した、<然り！>と。神は一つ、そして多数でないことは、じつに余の小さな靈魂に喜ばしい音ずれであった。四つの方位に位置する四つの群れの神々に毎朝長い祈りを捧げ、途上に通り過ぎるすべての神社に長い祈りを反復し、それぞれに特別な誓いと断ち物をもってこの日をこの神に、かの日をか神のために守る必要は、もはやなかった。余が祈りを言わないからと彼らはもはや余を罰することはできないという確信にみちて、直立した頭と澄んだ良心とをもって、神社また神社を、ああ、如何に余は昂然と通過したことよ、余は余を後援し支持したもう神々の神を見出したからである。」「余の友人たちはただちに余の気持の変化を認めた。余はこれまでは神社が見えてくるやいなや胸の中でそれに祈りを言わなければならなかったから、会話をやめるのが常であったのに、登校の途上ずっと余が愉快に談笑しつつ行くのには彼らは気づいた。余は<イエスを信ずる者>の契約に署名するよう強制されたことを悲しまなかった。唯一神教は余を新しい人とした。余は豆と卵とを再開した。余は基督教の全体を悟ったと考えた、それほどに一つの神という観念は感激的であった。新しい信仰によって与えられた新しい霊的自由は、余の心と体とに健全な感化を与えた。

¹⁴ ルクレティウス『事物の本性について』第4巻30節以下。『世界古典文学全集21』岩田義一／藤沢令夫訳、筑摩書房、1965年、356頁

¹⁵ Stephen Greenblatt, *The Swerve: How the Renaissance Began*, London, 2011. 邦訳は、スティーヴン・グリーンブラット『一四一七年、その一冊がすべてを変えた』河野純治訳、柏書房、2012年。

¹⁶ 内村鑑三『余は如何にして基督信徒となりし乎』(鈴木俊郎訳)岩波文庫、1938年、25-26頁

余の勉学はよりいっそうの集中をもって行われた。新しく賦与された肉体の活動力を受けて、余は山野を跋涉し、谷の百合、空の鳥を観察し、天然を通して天然の神と交わらんことをもとめた。」

これが福音、よき知らせ(*εὐαγγελλιον* すなわち *evangelion*)です。その根拠は、旧約のアニミズム否定、そしてそれを踏まえた神と人の仲保者としてのイエス・キリスト、すなわち受肉です。これは人間の自然と本能を否定する教えです。パウロはそれを「ユダヤ人には躓き、異邦人には愚か」と書き(「コリント人への第一の手紙」1章23節)、また「聖書に書いてあるとおり、＜目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったこと＞」と書きます(「コリント人への第一の手紙」2章9節)。躓きであり愚かであるキリスト教は、どの文化の人間にとっても理解不能で異物です。東北学院のラーハウザー記念礼拝堂もいくら秋保の石を壁に使っているとは言っても、日本という風土のなかでは異物です。ですから容易には近づけない憧れの対象でもあります。それは日本、アジアの日本においてだからではなく、キリスト教を最初に国教としたローマ帝国、そしてそれを受け継ぐ欧米においても同じです。福音は自然状態の人間を否定する異物です。誰にとっても異物、だからこそ、誰にとっても平等に開かれている、それが福音です。東北学院のラーハウザー記念礼拝堂とその正面に設置されたステンドグラスこそは、東北という土着を誇る地方にあって、神に由来する超越的な異物です。それは憧れの対象でもあり、大学内部に留めておくものではありません。学生を育てるとともに、教育を通じて地域の人々にも「福音(よき知らせ)」を伝えることが東北学院の建学の精神でしょう。それによって東北の土着は、文字通りイザベラ・バードのいう「エデンの園」¹⁷、クリストファー・ノッスのいう「アジアのスコットランド」¹⁸になります。東北学院の中心にある礼拝堂、そしてその奥の正面にあるステンドグラスはシュネーダー院長が寄付を募って1932年に献堂されました。名実ともに建学の精神を体現しています。

¹⁷ 『イザベラ・バードの日本紀行(上)』(時岡敬子訳)講談社学術文庫、2008年、320頁

¹⁸ Christopher Noss, *Tohoku: The Scotland of Japan*, Philadelphia, 1918, p. 292

図 1



図 2



図 3



図 4

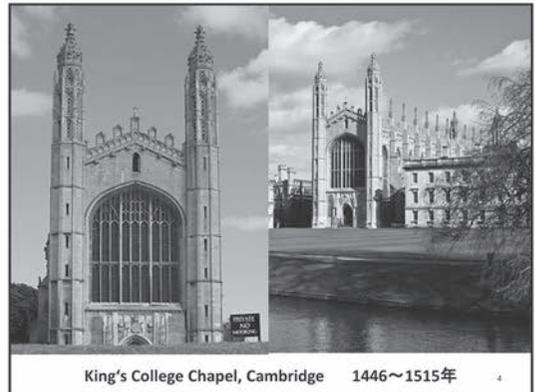


図 5

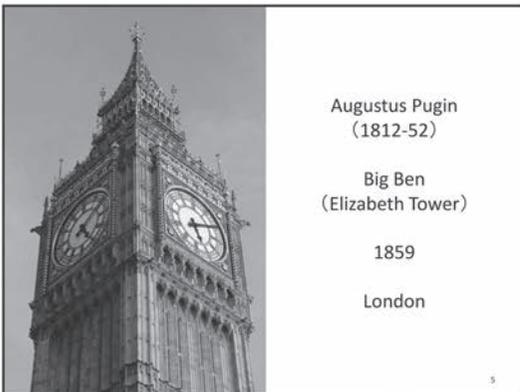


図 6



図7



図8



図9



図10



図11



2016 年度

第 21 回 キリスト者教員研修会報告

第 21 回キリスト者教員研修会プログラム

日時：2017 年 1 月 10 日（火） 14：00～19：30

場所：土樋キャンパス 8 号館第 1 会議室

総合司会 原田浩司大学宗教主任

時間・会場	内 容
14：00～14：30	開会礼拝 司会・説教 阿久戸義愛大学宗教主任 讃美歌 413 聖 書 詩編 150：1-6 説 教 「主をのみ畏れる」 祈 禱 讃美歌 545 II
14：30～15：30	主 題 「大学礼拝への奨励と説教」 講師 野村信宗教部長
15：30～15：50	コーヒー・ブレイク
15：50～17：50	自由討議 司会 藤原佐和子大学宗教主任 発題をめぐって
17：50～18：00	休憩
18：00～19：30	クリスチャン・フェローシップ 司会 鐸木道剛大学宗教主任 閉 会

【主 題】

「大学礼拝への奨励と説教」

宗教部長 野村 信

- 1、大学礼拝は「建学の精神」の具体的表れであり、慎重で、積極的な取り組みが必要である！
- 2、大学礼拝(月間約 80 回、午前中の 30 分)は、大学の営みの中心に据えられている。
キリスト者教員全体の奉仕の場であり、非常に貴重！キャンパスにいる時には出席する。
現状はさらに多忙で苦し紛れになる傾向がある。聖日礼拝縮小説教、学会報告、勧誘、強制・・・
- 3、現行の大学礼拝の内容を毎回満足あるものとすることを目指す。
- 4、教員課題
 - 1) 時間内で収める。(土曜は 45 分までには終了。泉は時期によるが早めに。多賀城も)
 - 2) 聖書箇所長さと言教長さの合計が大事。10 時 31 分から 41 分までが理想である。
 - 3) 無原稿説教は長くなる傾向がある。原稿を全部書くと良い。
2000～2400 文字 400×5～6 枚(語る速さ、間の取り方により、個人差はある)
 - 4) 説教内容
 - i) 原則的に、聖書から伝えるべきメッセージを汲み取る。⇒5)へ
 - ii) 学生対象の大学礼拝という意識をもつことを心がける。
(礼拝を構成する聖餐がないということは、大学礼拝は教会の礼拝に対して二次的である)
 - iii) 逸脱には注意する
 - ①自己称賛、自己活躍を語ることは控える。神称賛、神活躍を語る。
 - ②テレビ、ネット、スマホ、アニメなどの言及を少なくする努力。
(どこか商魂が潜み、流行的、人造的、作為的)
 - ③強制的、断罪的、一方的な社会批判に終始しないこと。
- 5) 聖書からメッセージを汲み、現代(若者)へ適応
 - i) 福音的・救済的・希望的指針
キリストの福音の告知、贖罪、再生、信仰・希望・愛などの聖書の中心メッセージ。
 - ii) 教育的・人間形成的指針・・・人格形成、人格陶冶、教訓、知恵、人生論など
 - iii) 倫理的・道徳的指針・・・良い生活への励まし、善行の勧め、神愛と人愛を促す。
ボランティア、人道・博愛、奉仕、貢献へ奨励。
 - iv) 平和的、社会的、身辺的、時事的、思想的言及

- v) 学事歴的、学業的、時節的、気候的、健康的奨励
- vi) キリスト教関連書籍(書物や童話など)や例話などと関連させつつ奨励

6) 今後の課題

- i) 学生のアンケート実施の是非
 - ① 半年、一年の期間で可能
 - ② 学生からの投書もあり得る。投書箱の設置も。
- ii) 学内外の説教者への周知徹底
 - ① 大学礼拝のマニュアルを配り、懇談会か。
 - ② 礼拝司会者懇談会の充実か
- iii) 説教用図書
 - ① 図書(註解書他)の充実と図書の紹介
 - ② 説教者のために研修会・講演会をもてると良い。
- iv) 説教分析・評価の実施の是非
 - ① 録音をとり、それを議論する。
 - ② 説教の訓練、研鑽の方法はあるのか。

5、学生への礼拝出席の奨励・・・学生の礼拝出席を増やす。大学礼拝出席学生数の増加について

1) どのようにしたら、強制しないで大学礼拝の出席を促すか。

- i) 強制する・・・成績評価や単位修得に直結すると語って礼拝出席を強制する。

⇒後の、礼拝やキリスト教に関する学生評価が著しく悪い。

- ii) ある程度は強制せざるを得ない。

- ① 入学試験時に読み上げる大学礼拝出席への奨励文
- ② 大学の建学の精神であること
- ③ キリスト教そのものが人格陶冶的、形成的、貢献的、文化・社会・未来的…5)へ
- ④ 強いられた恩寵
- ⑤ キリスト教学の教員や第1校時に講義のある教員が率先して、学生を礼拝堂に導く。

2) 大学礼拝の場合に特に心がけること ⇒最初が肝心!

- i) 新入生のオリエンテーションの、最初礼拝でしっかりと説明し、好印象を与える。
良い時間を過ごせたという、毎回来たいという気持ちを持ってもらう。
- ii) 最初のキリスト教学で礼拝の出席についてしっかりと説明する(⇒裏面を一例として参照)
- iii) 礼拝出席記録カードに記入することをよく指示し、最終講義などで回収する。
- iv) 礼拝出席報告書も同様に、最終講義か、あるいはどこかに提出させる。
教員が誠実に処理していることで、学生もまじめに取り組む気になる。
- v) 学生に不利益、不愉快な思いをさせないこと!

礼拝時間が長く講義に遅れるとか、よく聞こえない、騒がしい、怒られた、

恐ろしかったとか、皮肉っぽかったとか、一度も顔を上げずに話したとか。
vi) 肉体のデリケートな表現とか、病名や差別などに関する言葉は慎重にする。

6、課題：礼拝への出席奨励は、学内のキリスト教活動、キリスト教性とも関係する。

1) キリスト者教員が積極的に礼拝に出ることは欠かせない。それに伴い、一般の先生たちへ

大学礼拝の時間には、学生が礼拝に出ることに差し障りないように心がけてもらう。これは一般の先生たちにどこかで話す機会が必要であるが、いまだに実現していない。大学全体がこの姿勢をもつことが求められる。クリスマス礼拝の時間に学生の出席を妨げない。

2) 学内全体にキリスト教的な雰囲気(キリストの香り：2 コリント 2:14)が浸透すると良い。

目に見える形で、耳で聞こえる形で、講義全体で、施設全体で、教職員の態度全体で。

3) それゆえ、キリスト教の文化的、活動的な側面、すなわちキリスト教音楽(器楽と声楽)、キリスト教美術(絵画、ステンドグラス)、キリスト教文学、キリスト教出版物(これは今盛んに行っている)、キリスト教ボランティア、キリスト者学生他大学交流会、キリスト者学生国際交流会など、他のキリスト教大学では行っている活動を、少し話題にするくらいの、大学礼拝を中心にして隔々にまで浸透し、広がりのある取り組みが検討される余地はある。現在は、「毎日の大学礼拝」と「必修のキリスト教学」というこの2点を固守し、「総合人文学科」を豊かにすることに全精力を使い切っている感がある。方針や人数的なことは欠かせないが、将来の新キャンパス構想を視野に(キャンパス間移動の時間ロスがなくなれば)、宗教部も新しい視野を一つ打ち出すことは出来るだろう。これらは今後の課題である。

4) この新キャンパス構想は、「礼拝堂の開放性」の課題を自ずと解決することになる。礼拝堂へ入りやすいということは、「礼拝」への出席にも意外に効果がある。

2016 年度

第 42 回 サマーカレッジ

2016年度 サマーカレッジ

宮城蔵王ロイヤルホテル

テーマ：「三校祖のこころざし ～東北学院創立130周年に思いを馳せて」

8月8日(月)	8月9日(火)	8月10日(水)
	7:00～ 朝食(各自、バイキング)	7:00～ 朝食(各自、バイキング) *各室フロントでチェックアウトを済ませ、荷物を持って集まること。 ～忘れ物のないように～
	9:00 朝の祈り 担当：茂泉(総1)	9:00 朝の祈り 担当：三浦(法3)
	9:20 エクササイズ	9:30 みんなでうたおう
	10:00 <講演と映画鑑賞> 「三校祖のこころざし」を 考える」-映画「東北学院の 100年」を観ながら- 講師 日野哲氏 東北学院史資料センター	10:00 グループ討論
	11:30 グループ討議	10:45 グループ討論報告 アンケートの記入 11:30 閉会礼拝 担当：鐸木道剛先生
	12:00 昼食	12:00 昼食
12:45 集合(土樋キャンパス 押川記念ホール)		12:40 バス出発
1:00 <講演 I > 公開講演 「戦争と東北学院 キリスト教 主義学校の苦悩」 講師 河西晃祐先生 東北学院史資料センター長 司会：原田浩司先生	1:30 体験学習 元窯工房にて陶芸体験	
4:00 歴史資料室見学(礼拝堂地下) バスでホテルに移動	3:30 レクリエーション 担当：安垣(人2)、木皿(歴2)	
5:00 開会礼拝 北 博先生 オリエンテーション(事務局) 自由時間 各部屋および全体の親睦会	ビーチボール・フットサル ソフトボール、 DVD鑑賞など	
6:00 夕食 担当：東(言1)、佐藤(歴2)	5:30 自由時間：入浴など	
7:30 ディスカッション 「東北学院とわたし」	6:00 夕食 担当：中村(言1)、幕田(人2)	
8:15 レクリエーション 担当：三浦(法3) 福本(営2)、宮崎(歴2) 五十嵐(人2)、佐藤(地1)	7:30 証と讃美の時 証：木皿(歴2)、佐藤(法1) 高橋(営1)、藤江(共1) 讃：佐藤(総2)、大畑(言1) 他、全員 学生企画募集	
9:00 夕べの祈り 阿久戸義愛先生	8:15 花火大会 担当：中村(言1)、 佐藤(歴2)	
9:30 解散 ☆ 就寝 ☆	9:00 夕べの祈り 藤原先生 9:30 解散 ☆ 就寝 ☆	



講演と映画鑑賞

「“三校祖のこころざし”を考える」

—映画「東北学院の100年」を観ながら—

東北学院史資料センター 日野 哲

「三校祖のころざし」を考える
—映画「東北学院の100年」を観ながら—

東北学院史資料センター 日野 哲

「三校祖のころざし」を
考える」

—映画「東北学院の100年」を
観ながら—

東北学院史資料センター 日野 哲

1

「NHK大河ドラマ」2013年 2015年



会津 長州

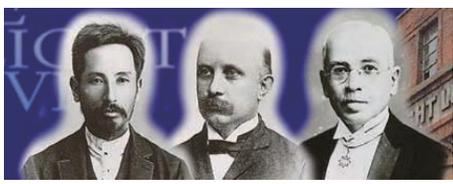
2

吉田松陰のことば

「きみの志は何ですか？」

3

三校祖



4

誕生日

押川方義 1850年1月17日
(嘉永2年12月5日)
※1853年 ペリー、浦賀に来航(開国を要求)

D.B.シュネーダー 1857年3月23日

W.E.ホーイ 1858年6月4日
※1861年 南北戦争が勃発(~1865年)

5

「新しい時代の始まりの時」

アメリカ:
西へ(未開の西部へ)、そして太平洋の
対岸の未知の国々へ目を向け始めた。

日本:
東へ(アメリカやヨーロッパへ)、西欧文明
へ目を向け始めた。

6

「幕末・明治」

欧米列強の植民地化を免れるために
近代化を推進した時代

近代化(西洋化) = 民主主義・啓蒙主義
(キリスト教)
↓
国家主義

7

1891(明治24)年 内村鑑三不敬事件
1899(明治32)年 文部省、訓令第十二号発令
(宗教教育の禁止)

東華学校(宮城英学校) 設置主: 仙台区(市)長
1886年~1892年閉校 校長: 新島 襄
宣教師: J.H. デフォレスト

宮城女学校(宮城学院) 校主: 押川方義
ストライキ事件 1892年 ⇒ 日本精神を基調とした教育と
相馬黒光等5名退学 学校の管理運営を日本人に
委ねることを要求

8

「東北学院の草創時代」

1885(明治18)年 ホーイ、来日
1886(明治19)年 仙台神学校、授業開始
1887(明治20)年 仙台教会と神学校校舎を南町通りに移転
シュネーダー、来日
1888(明治21)年 ホーイ、仙台教会より敷地を購入、寄宿舎を建築
(東北学院として初めての建物)
1890(明治23)年 ホーイ、仙台教会より敷地を購入、校舎建築を開始
1891(明治24)年 「東北学院」設置認可、神学校校舎完成
1892(明治25)年 東北学院開院式
1894(明治27)年 ホーイと押川、相次いで辞任願を提出
押川、大日本海外教育会を設立
1896(明治29)年 押川、北海道同志教育会を設立
島崎藤村、普通科教師として着任
ホーイ、中国を視察
1898(明治31)年 ホーイ、辞任(中国で伝道開始)
1899(明治32)年 ホーイ、辞任(中国で伝道開始)
1901(明治34)年 押川、辞任。シュネーダー、院長に選任

9

W.E. ホーイ

(William Edwin Hoy)

- ・家系: 不撓不屈の開拓農民の血が流れていた
- ・家庭: 篤いキリスト教信仰に包まれていた
- ・教育: 「ハイデルベルク信仰問答」による教育
遺産を放棄して、伝道者となるのに必要な教育(高校、大学、神学校)を受ける
- ・献身: 「全世界に行って、すべての造られた
ものに福音を宣べ伝えなさい。」(マルコ
16: 15)

10

日本からの第一報

大陸横断の列車の旅、太平洋を渡る船の旅は快適
で示唆に富むものでした。…私は12月1日の午後4
時に横浜に上陸いたしました。

※当時、大陸横断の列車は
1週間、太平洋横断の船は
3週間を要した。



11

仙台への招き (グリングの回顧)

12月1日、ホーイ兄弟が私の家に到着した。その翌日、(夕食の時に)彼はこう言った、「ところでグリングさん、私はどこへ行ったらよいのでしょうか。」私は答えた、「今や仙台でどのような好機が開けているかはお話しさせていただきます」。
…私が話し終わるや否や、彼はただちに答えて言った、「グリングさん、私は仙台に呼ばれているような気がします。私は自分の喜びを伝え、日本中で仙台ほどホーイが役に立つ所はないだろうと述べた。
次の月曜日(12月8日)の午後には、ホーイと私自身は仙台へ向かう船の上にあった。

※グリング: ドイツ改革派教会の最初の日本派遣宣教師
※二人は横浜から沿岸郵便船で石巻に下船、小舟で松島を経由して塩釜に上陸し、人力車で仙台に向かった。

12

仙台視察後の報告

仙台は重要な、そして将来性豊かな地方の中心都市で、新しい時代の胎動をひしひしと感じ始めている町です。
この町は現在も大いに発展を遂げております。いずれは帝国政府の中で大きな影響力を持つに至るでせう。…

数年前、一人の日本人牧師がこの町でキリストを宣べ伝え始めましたが、今では百三十名の会員を持つ教会に成長しました。私が日本に着いて二日目(12月4日)のこと、この日本人牧師が私に向かって、自分の所に来て手伝ってくれと申しました。

彼らが願っているのは、その美しい町の中にキリスト教の施設を持つことです。彼らは女子学校を欲しております。…女子教育について言えば、日本で最も急を要する場所と思われれます。

私はまず英語を教えることから取りかかり、いずれは聖書と信仰問答を目指すつもりです。もしかすると、男子学校がそこから生まれるかもしれません。…

私にとって仙台は、すでにわが心の宿る所となりました。

13

仙台での活動開始 (ホーイの10年後の回想)

1月13日、私は最初の日本人屋に移りました。(多くの青年が私の周辺に集まって来ている。)私は男子校を建てる好機が目の前にあることをすぐに感知し、伝道局本部に事情を書き送りました。しかし、激励は与えられませんでした。…

ある日のこと、押川兄弟が私の家に来て、十二枚の銀貨を見せました。それは福知の物語りですが、押川兄弟は目に涙を浮かべ、「私たちの祈りは聴かれ始めた」と言いました。

私が耳にしたのは、六人の青年が私のもともと来て、福音の伝道者になる訓練を受けたいと言っているということでした。そして、その時、その場で、私は押川兄弟に對し、これから一年間私がこの青年たちの生活の面倒を見ることをおこなうことに約束したのでした。

※十二枚の銀貨: 寡婦であった香味チカが、老後のために蓄えた一分銀12枚を捧げたこと。ホーイは内9枚を買って伝道局本部に送った。

※「ホーイの会計簿」: 仙台神学校の初年度経費(422ドル)は、全額「a Friend」からの献金と記載されている。

14

最初の教師と生徒(6人) 1886(明治19)年



15

一分銀

香味チカ

"Fragrant Taste"

"Nearness"



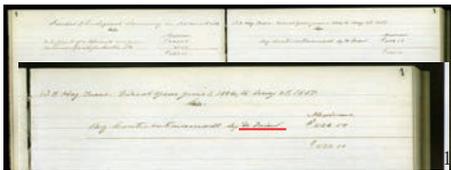
16

ホーイの会計簿

"Sendai Theological Seminary in account with W.E.Hoy, Treas.
Fiscal year June 1, 1886, to May 31, 1887"

Dr: To Support of 6 Students One Year Mexicans. \$390.00
To Amount paid for Books, etc. 32.00

Cr: By Contributions made by "a Friend" \$422.00



17

最初の建物(寄宿舎)の建築

私たちの神学校が私にとって、外国伝道事業の中でも、最も重要なものの一つであることは申し上げるまでもありません。... 私たちはこの学校を断念いたしません。私たちは希望を失いません。

私は主キリストのために、喜びをもって、負うべき重荷をあえて引き受ける決心をいたしました。私は仙台のキリスト者たちの所有する**教会の敷地の半分を購入いたしました**。...

この敷地に私はすでに**小規模ながら快適な校舎を建て始めました**。

私は在日宣教師団にも外国伝道局にも、一セントたりとも支出をお願いするつもりはありません。

※南町通りの全敷地購入費2,300ドル。内、仙台教会が1,300ドルを支払い、残りの1,000ドルをホーイが支払い購入した。

※当時、改革派教会内で外国伝道のために捧げられた最も多額な個人献金であったため、当初はアメリカ国内での公表はなされなかった。

18

最初の校舎(1888年 ジョン・オールド記念寄宿舎)



19

神学校校舎の建築

※伝道局は絶えず資金難に苦しんでいた。

(1889年4月、宮城女学校校舎・寄宿舎、宣教師館2軒が完成)

(もしも1890年の春までに、改革派教会が仙台神学校のために校舎を建築する適切な措置を講じない場合には、)私は**自費で必要な建物を建てることを提案いたします**。...

神学校の校舎はいま必要なのです。私はこの建物を主に祈り求め続け、もしも必要とあればその重荷を私に負わせて下さるように... 願ひ求めて参りました。このような建物を建てることは私にとって大きな、大きな重荷になるに違いありません。しかし、私は主に祈つてきましたし、主のためならば苦難を少しも恐れませんが、

20

※1890年3月伝道局からホーイ宛の電報
伝道局からの条件

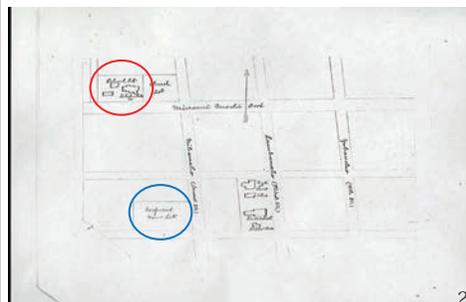
- ①経費総額が5,000ドルを越えないこと
- ②建物は伝道局の所有地か、オールド記念館の土地(将来伝道局が名目だけの代価で買い上げることになっている)に建てること

(『ホーイ伝』より)

この年(1890年)の夏、...ホーイは伝道局に対し、**オールド記念館と仙台教会に残された僅かな土地を500ドルで買って、神学校へ寄贈したいと告げる。ただし、彼の名は伏せたままという条件であった**。加えて、ドルの下落のため、建築費は当初の5,000ドルから7,500ドルに増大した。

21

校舎の配置図 (1901年 シュネーダー手書きの地図)



22

強盗事件

(『百年史』より)

待ちに待った伝道局からの建築資金4,000ドルが送金されて、経理担当のホーイ家の金庫に取められたその夜、ある悪劇が起こった。それは何年もホーイ一家の胸に秘められ、第一人の心と裏目とを深く苦しめただけに、余計に悲劇的であった。事件から6年も後になって、ようやくホーイは自分の口で出来事の内容を明らかにした。

1890年10月のある夜遅く、私は耳馴れた「郵便」という呼び声を玄関先で耳にしました。いつものことなので、何の危険も感ずることなしに、私は戸口まで参りました。するとそこに三人の覆面の男が立っていました。彼らはそれぞれ、そととするような日本刀を私の顔と胸に間近く突き付けました。彼らは宣教師団金庫に案内せよと迫りました。...

(金庫の扉が開くやいなや、強盗どもは勝手に7,000円を取り出しました。一部分は校舎の建築費で、他は宣教師団の資金でした。

「主よ、この重荷を私に負わせて下さい。」

23

仙台神学校校舎（開院式1892年当時）



24

(『百年史』より)

伝道局は、最終的にはホーイが借り入れた金額に利息も添えて**金額ホーイに払い返した。**

さらに付言するならば、この補償金はやがて中国に渡った**ホーイの再出発の有力な資金**となるのである。

(「ホーイの手紙」1891年5月より)

私は神に祈ったものでした。何か他の人がすることもできず、しようもないことをなさせて下さいますように、と。そして、この激しい戦いと重荷に満ちた**五年の間に**、私は神学校の**ために、少なくとも5,000ドルの献金**を捧げるという無限の喜び(このこと自体は全く個人的なことですが)を味わってきました。

25

ホーイの家族（1897年頃）



26

ホーイの辞任

(1)健康問題

重い喘息 ⇒ 転地療養の必要

(2)院長押川との関係(職務権限をめぐって)

1893年 ホーイ、理事局長・副院長の辞職書を提出

1894年 押川も院長の辞表を提出

⇒ ホーイは一旦辞任を撤回し、賜暇帰米

(3)宮城中会と在日宣教師団(ミッション)との関係

ミッションからの独立(自給) ⇒ ホーイへの攻撃

中会による管理監督権の確立 ⇒ 押川の関与

27

(4)中国伝道への献身

1894年 ホーイ、賜暇帰米

1896年 ホーイ、改革派教会全国総会に出席

中国伝道の最初の宣教師に推薦⇒断る

ホーイ、帰着 ⇒ 喘息の再発

1898年 ホーイ、喘息治療を兼ねて中国を視察

中国伝道の方針を固めて帰着

喘息が悪化 ⇒ 在日宣教師団は転地を決議

1899年 ホーイ、伝道局から中国へ出発の許可を得る

1899年 **ホーイ一家、仙台を出発**

28

「もう一つの新しい出発」

私たちは、長崎から乗船して上海へ向かったのですが、日本を最後に目にして、私の心はひどく痛みました。

現地時間に合わせるため時計を1時間遅らせた時、私はこう思いました、

「このように私は自分の人生を14年前に巻き戻し、そもそもの始めからやり直すのだ」と。

29



ホーイの碑

ホーイの墓

メアリ・ホーイの墓

(仙台市北山) (アメリカ、ミフリンバーグ) (中国、漢口)

30

D.B. シュネーダー

(David Bowman Schneder)

- ・家系: 1729年、ドイツ南部国境近くのスイスから移住(デイヴィドは6代目の世代)
Schneider ⇒ Schneder
- ・家族: 貧しい農家、信仰深いキリスト教徒
- ・教育: 家庭と教会での宗教教育(教義問答書による)
普通教育は、冬の4か月のみ

31

・教育Ⅱ: フランクリン・アンド・マーシャル大学
伝統的な古典教育

↑
↓
ハーバード大学の「教科選択方式」

級友「デイヴィドは、物静かで、遠慮がち、どちらかという社交的ではなかった。しかし、彼を知っているみんなから尊敬され、愛されていた。」

32

宣教師志願書を送付(1883年)

二人目の宣教師派遣の際に

「私は、知的にも、精神的にも、宣教師としての重大な責任に適するものではありません。」

私の社交性は、普通以下です。私の組織能力や行政能力は優れたものではありませんし、私の神学的訓練は不十分です。」

「妻帯者として任地に赴任したいのですが、結婚の見通しはまだありません。」

「私は現在、両親の意志に反して、宣教師を志願しているのです。」

⇒ J.P.モールが派遣

シュネーダーは、牧師に就任

33

三人目の宣教師は、W.E.ホーイ(1885年)

シュネーダーは、日本へ出航する直前のホーイに、教会での説教を依頼

(F&M在学中の金子と佐藤という日本人学生を同伴 ※金子謙三(花巻出身))

⇒シュネーダーが出会った最初の日本人)

ホーイの別れの言葉:

「次には、近い将来、日本で再会したい」

34

四人目の宣教師に選任(1887年)

グリーン・モール・ホーイの勧告(推薦)

※1885年、ブルボーとオールドを宮城女学校に派遣

1887年11月29日 サンフランシスコを出帆

12月21日 横浜着 ⇒ホーイが出迎え

12月27日 ホーイとオールドの結婚式

1888年 1月 1日 仙台に到着

※1887年12月15日 東北本線上野・仙台・塩釜間、開通

35

若き日のシュネーダー夫妻



36

鈴木義男の回想

(シュネーダー追悼一周年礼拝において)

「先生は、私達を決して荒い言葉や厳しい調子で叱られたことはありませんでした。いつも物静かに話をなさいました。」

一度、私が先生のお叱りをうけている時に、顔を上げて見ますと、先生は眼に一杯涙を浮かべて、じいっと私を見つめておられました。

先生はそれから、『鈴木さん、あなたは何のためにこの学校に勉強に来られたのですか?』と言われました。先生のおっしゃったことはそれだけでした。」

37

月浦利雄の回想

(日野が中高時代に礼拝で聴いた言葉)

「先生は、『この校舎も机も椅子も、すべてアメリカの方々への尊い献金によるものです。」

ですから、これらに傷をつける人は、私の額に傷をつけてください』と、よく言っておられた。」

シュネーダーがミッションに送った報告

“They are christian in their thinging and living.”

※「They」は、学院の卒業生

38

シュネーダーの募金活動による建物

- 1905(明治38)年 普通科(中学部)校舎
 1919(大正8)年 仙台大火のため、全焼
 1922(大正11)年 中学部校舎再建
 正面玄関に「3L」(LIFE, LIGHT, LOVE)を掲げる
 1926(大正15)年 専門部校舎(大学本館)
 1932(昭和 7)年 ラーハウザー記念礼拝堂
 1938(昭和13)年 シュネーダー死去
 1953(昭和28)年 シュネーダー記念図書館

39



中学部校舎



40



大学本館(旧専門部校舎)



大学院棟
(旧シュネーダー記念図書館)



ラーハウザー記念礼拝堂

41

押川方義 (おしかわ まさよし)

- ・家系: 四国松山藩の下級武士
- ・家族: 橋本家に出生 ⇒ 11歳で押川家の養子
- ・教育: 藩校明教館⇒ 藩派遣留学生として上京
洋学(英学)を学ぶ
パラ塾にて、キリスト教信仰へ導かれ、受洗
1872(明治5)年3月10日
日本人による初めてのプロテスタント教会
会「日本基督公会」(横浜公会)を設立
※キリシタン禁令の高札撤去は、翌年1873年2月

42

押川を信仰に導いた人物



S. R. ブラウン
 「日本の伝道は、日本人の手で」
 基本的な伝道方策



J. H. パラ
 キリストによる「日本の救国」
 大きな目標

⇒ 押川独自のナショナルイズムの形成へ
 「神を畏るべし、国帝を敬うべし」(ペトロ 12:17)

43

「武士になったキリスト者」

押川方義 松山藩(13石)

※正岡子規(松山藩)や
 福沢諭吉(中津藩)も同じ13石



植村正久 旗本(1500石)
 井深梶之助 会津藩(550石)
 本多庸一 津輕藩(300石)

44

押川の活動 — そのⅠ —

横浜⇒新潟⇒仙台

- ・新潟伝道(パームのもとで)
※イザベラ・バードも『日本奥地紀行』に記録している。
- ・仙台教会の創立
- ・東北伝道(福島、山形)
- ・仙台神学校(東北学院)の創立
- ・宮城女学校(宮城学院)の創立
- ・山形英学校の設立

45

押川の活動 — そのⅡ —

より広く、より遠く

- ・欧米視察旅行 1889(明治22)年3月～翌年5月
⇒「武士道化された基督教」による国家主義へ
 ⇒欧米列強との大きな文化的・政治的・軍事的落差
- ・大日本海外教育会の創設
⇒「壮大な大アジア主義への道」
 会長: 押川⇒大隈重信
 副会長: 本多⇒押川 会計監督: 渋沢栄一
 賛同人: 井上馨、板垣退助、新渡戸稲造、他

46

朝鮮に「京城学堂」と「三南学堂」を設立

- ・北海道同志教育会の設立
⇒ロシアの南下政策を念頭に置いたもの
会長：押川 副会長：本多
- ・各地の鉱山開発に関与
- ・衆議院議員に立候補
1915(大正4)年 福島県より(落選)
1917(大正6)年 愛媛県郡部より(当選) 67歳
1920(大正9)年 松山市より(当選) 70歳
1923(大正12)年 市川房枝らの婦人参政同盟運動を支援
1924(大正13)年 松山市より(落選)

47

1926(大正15)年 創立40周年

専門部校舎(現大学本館)の完成に合わせて挙行
⇒三校祖、25年ぶりの再会



48



1927年3月3日 ホーイ、中国から帰米の途次、太平洋上の船中で死去(68歳)
1928年1月10日 押川、東京にて死去(77歳)
1938年10月5日 シュネーダー、仙台にて死去(82歳)

49

押川の最期

- ・内村鑑三
「一時伝道を擲(なげ)ちて実業に従事し、代議士に成られしも、世を去る前には再び旧の信仰に還へられ、平安の内に眠られしと聞く。」
- ・押川の「絶筆」
「我は復活なり 生命なり 我を信ずる者は死ぬとも生きん 凡そ生きて我を信ずる者は永遠に死なざるべし」(ヨハネ11:25)

50

平河内健治(前理事長)曰く
「東北学院の建学の精神は、
押川のキリスト教**信仰**の確信と情熱(PASSION)
ホーイの**希望**と幻(VISION)
シュネーダーの**愛**と思いやり(COMPASSION)
であります。」

＝パウロ：「信仰、希望、愛」
＝シュネーダー：
「LIFE(命)、LIGHT(光)、LOVE(愛)」

51

三校祖のこころざし

「神のみに栄光あれ」

52

2016 年度（平成 28 年度）
東北学院大学宗教活動報告

2016（平成 28）年度東北学院大学宗教活動報告

◇教員組織

宗教部長	野村 信
書記	原田浩司
土樋担当	北 博、鐸木道剛
多賀城担当	阿久戸義愛、吉田 新
泉 担 当	原田浩司、藤原佐和子
キリスト教文化研究所所長	鐸木道剛
総合人文学科長	出村みや子
大学オルガニスト	今井奈緒子

◇大学礼拝 資料 1

月～土曜日	10 時 25 分～ 10 時 45 分（土樋朝、多賀城、泉）
水曜日	19 時 35 分～ 19 時 55 分（土樋夜）
月曜日	19 時 30 分～ 20 時 00 分（泉男子寄宿舍、泉女子寄宿舍）
火曜日	19 時 30 分～ 20 時 00 分（旭ヶ岡寄宿舍）

年間総出席者数

キャンパス	2016 年度			2015 年度			2014 年度		
	総数	回数	平均	総数	回数	平均	総数	回数	平均
土樋(朝)	15,156	180	84	18,285	181	101	17,033	180	95
多賀城	17,094	180	95	34,784	181	192	39,514	178	222
泉	53,352	180	296	73,112	181	404	67,264	180	374
土樋(夜)	835	32	26	820	32	26	1,147	33	35
総 数	86,437	572	151	127,001	575	221	124,958	571	219

〔備考〕・春季・秋季特別伝道礼拝、大学クリスマス礼拝を含む。

・平均値の小数点以下四捨五入。

総回数 659 回〔3 キャンパス（572 回）・寄宿舍（87 回）〕

－ 礼拝司会者内訳 －

学外（牧師）	329 回
学内	330 回

—学内者内訳—

院長、学長、キリスト者教員、学生など	76回
宗教部関係者	254回

—宗教部関係者内訳—

宗教部長	37回 (含 音楽礼拝司会)
阿久戸義愛大学宗教主任	28回 (含 音楽礼拝司会)
北博大学宗教主任	30回
鐸木道剛大学宗教主任	27回
原田浩司大学宗教主任	29回
藤原佐和子大学宗教主任	21回
吉田新大学宗教主任	32回 (含 音楽礼拝司会)
出村みや子総合人文学科長	29回 (含 音楽礼拝司会)
佐藤司郎先生	28回
今井奈緒子先生	5回

◇春季宗教教育強調週間特別伝道礼拝

土樋キャンパス (朝)	2016年5月11日 (水) 10時10分～11時	<u>320名出席</u>
	説教者 井ノ川勝牧師 (日本基督教団金沢教会)	
	「あなたは自分を愛していますか」	
	新約聖書 マタイによる福音書 第22章34～40節	
多賀城キャンパス	2016年5月11日 (水) 10時10分～11時	<u>694名出席</u>
	説教者 左近豊牧師 (日本基督教団美竹教会)	
	「砂漠がオアシスに変わるとき」	
	旧約聖書 イザヤ書 第35章5～10節、	
	新約聖書 ルカによる福音書 第10章21～24節	
泉キャンパス	2016年5月10日 (火) 10時10分～11時	<u>996名出席</u>
	説教者 井ノ川勝牧師 (日本基督教団金沢教会)	
	「あなたは自分を愛していますか」	
	新約聖書 マタイによる福音書 第22章34～40節	
土樋キャンパス (夜)	2016年5月11日 (水) 19時35分～20時25分	<u>39名出席</u>
	説教者 左近豊牧師 (日本基督教団美竹教会)	
	「砂漠がオアシスに変わるとき」	
	旧約聖書 イザヤ書 第35章5～10節	
	新約聖書 ルカによる福音書 第10章21～24節	

◇秋季宗教教育強調週間特別伝道礼拝

- 土樋キャンパス（朝） 2016年10月13日（木）10時10分～11時 318名出席
説教者 森下辰衛氏（三浦綾子記念文学館特別研究員）
「希望とは“にもかかわらず”愛すること」
新約聖書 コリントの信徒への手紙一 1章18節
- 多賀城キャンパス 2016年10月12日（水）10時10分～11時 178名出席
説教者 長谷川与志充氏（三浦綾子読書会顧問）
「三浦綾子が伝える『なくてはならぬもの』」
新約聖書 マタイによる福音書 11章28節
- 泉キャンパス 2016年10月12日（水）10時10分～11時 686名出席
説教者 森下辰衛氏（三浦綾子記念文学館特別研究員）
「希望とは“にもかかわらず”愛すること」
新約聖書 コリントの信徒への手紙一 1章18節
- 土樋キャンパス（夜） 2016年10月12日（水）19時35分～20時25分 40名出席
説教者 長谷川与志充氏（三浦綾子読書会顧問）
「三浦綾子が伝える『なくてはならぬもの』」
新約聖書 マタイによる福音書 11章28節

◇第28回泉キャンパスクリスマス

- 日 時 12月2日（金）18時30分より（18時開場） 約300名参加
場 所 泉キャンパス礼拝堂
司式者 原田浩司先生（大学宗教主任）
奏楽者 今井奈緒子先生（教養学部教授、大学オルガニスト）
説教者 戸井田栄牧師（日本基督教団仙台松陵教会）
説教題 「降誕の目的」

◇大学クリスマス

- 泉キャンパス 584名出席
日 時 12月15日（木）10時25分より
場 所 泉キャンパス礼拝堂
司式者 野村信先生（宗教部長）
奏楽者 大泉真理先生（礼拝オルガニスト）
説教者 須田拓先生（東京神学大学准教授）
説教題 「神共にいますしるし」

聖書 旧約聖書 イザヤ書 第7章1～17節
新約聖書 マタイによる福音書 第1章18～25節

土樋キャンパス

350名出席

日時 12月15日(木) 16時30分より
場所 ラーハウザー記念東北学院礼拝堂
司式者 北博先生(大学宗教主任)
奏楽者 渡辺真理先生(礼拝オルガニスト)
説教者 須田拓先生(東京神学大学准教授)
説教題 「暗闇に輝く光」
聖書 旧約聖書 創世記 第3章8～19節
新約聖書 ルカによる福音書 第1章67節～2章7節

多賀城キャンパス

306名出席

日時 12月16日(金) 10時25分より
場所 多賀城キャンパス礼拝堂
司式者 吉田新先生(大学宗教主任)
奏楽者 京極扶美恵先生(礼拝オルガニスト)
説教者 須田拓先生(東京神学大学准教授)
説教題 「人を自由にするクリスマス」
聖書 新約聖書 マタイによる福音書 第2章1～12節

◇第21回スプリング・カレッジ

日時 2016年4月16日(土) 14時30分～18時
場所 泉キャンパス礼拝堂(1階) 小礼拝堂、会議室
内容 キリスト者等推薦入学生へのガイダンス
開会礼拝 野村宗教部長
挨拶 野村宗教部長

キリスト者等推薦学生の心得・義務の説明 吉田大学宗教主任

- ①年間宗教行事への参加(必席)について
- ②大学礼拝への出席について
- ③聖書研究会か聖歌隊のいずれかへの加入について
- ④出席教会の確定と報告について
- ⑤その他(統一協会への注意など)

学生21名、教育職員7名、事務職員3名 計31名参加

◇第42回サマー・カレッジ

日 時 2016年8月8日(月)～8月10日(水) 2泊3日
場 所 宮城蔵王ロイヤルホテル
主 題 「三校祖のこころざし～東北学院創立130周年に思いを馳せて」
講 師 東北学院史資料センター長 河西晃祐先生
東北学院史資料センター 日野哲氏
参 加 学生16名、宗教部長、大学宗教主任6名、講師1名、事務局2名(計26名参加)

◇第61回教職員修養会

日 時 2016年9月1日(木)～9月2日(金) 1泊2日
場 所 宮城蔵王ロイヤルホテル
主 題 「聖書に聴く」
講 師 明治学院大学経済学部教授、元院長・学長 大西晴樹先生
参 加 125名

◇キリスト者等推薦入学生との懇談会

日 時 2016年7月4日(月) 泉キャンパス 学生15名ほか 計19名参加
2016年12月5日(月) 泉キャンパス 学生11名ほか 計15名参加

◇礼拝奉仕者懇談会(事務職員)

土樋キャンパス 2016年6月2日(木) 11:00～11:20
松本学長、原田副学長、阿久戸大学宗教主任、鐸木大学宗教主任、
原田大学宗教主任、菊地総務部長、渡邊総務課長ほか 計28名参加
多賀城キャンパス 2016年5月25日(水) 11:00～11:20
松本学長、吉田大学宗教主任、鈴木総務部次長ほか 計21名参加
泉キャンパス 2016年5月17日(火) 11:00～11:20
松本学長、野村宗教部長、鐸木大学宗教主任ほか 計21名参加

◇礼拝オルガニスト懇談会

日 時 2017年2月20日(月) 11時～13時
場 所 土樋キャンパス会議室
参 加 27名(礼拝オルガニスト他)

◇礼拝司会者（牧師・宣教師）懇談会

日 時 2017年2月20日（月）18時～20時
場 所 仙台国際ホテル
参 加 44名（牧師・宣教師他）

◇宗教部会

開 催 日 2016年 4月7日（木）、5月12日（木）、6月2日（木）、7月14日（木）、
9月29日（木）、10月27日（木）、11月24日（木）
2017年 1月19日（木）、2月20日（月） 計9回

◇大学宗教主任会

開 催 日 2016年 5月12日（木）、6月2日（木）、11月1日（火）、
2017年 1月26日（木）、2月22日（水）メール審議 計5回

◇聖書研究会

土樋キャンパス	北 博	旧約聖書を読み、語ろう
	佐藤 司郎	聖書と現代
	出村みや子	アウグスティヌスの「告白」を読む
	野村 信	ギリシャ語聖書読書会
	藤原佐和子	フェミニスト神学入門
多賀城キャンパス	吉田 新	聖書に学ぶ生きるヒント
	鐸木 道剛	キリスト教と物質文化
	長島 慎二	聖書日課を読む
泉キャンパス	阿久戸義愛	キリスト教と現代
	野村 信	み言葉を喜び、歌う
	原田 浩司	キリスト教の基本を学ぶ

◇事務打合せ

日 時 2016年11月22日（火）16時 8号館第1会議室
議 題 「2016年度補正予算及び2017年度予算案について」
場 所 土樋キャンパス本館会議室
参 加 宗教部長、大学宗教主任、宗教音楽研究所所長、各キャンパス事務担当者

◇宗教部自己点検評価委員会 資料2

① 2016 年度第 1 回

日 時 2016 年 10 月 13 日 (木) 16 時 本館会議室

主 題 「2016 年度 (前期) 宗教活動について」
「2016 年度 (後期) 宗教活動予定について」

② 2016 年度第 2 回

日 時 2017 年 2 月 24 日 (金) 14 時 本館会議室

主 題 「2016 年度東北学院大学宗教活動報告について」
「2017 年度東北学院大学宗教活動予定について」

◇青山学院大学・東北学院大学合同チャプレン代表者会

2016 年 8 月 23 日 (火) 伊藤悟青山学院大学宗教部長：東北学院大学訪問

2016 年 9 月 19 日 (月) 野村信宗教部長：青山学院大学訪問

◇宗教部研修会

日 時 2016 年 7 月 14 日 (木) 16 時～ 19 時 30 分

場 所 東北学院サテライトステーション会議室

発 題 「TG グランドビジョン 150 と宗教部の課題」

発題者 原田大学宗教主任、吉田大学宗教主任

参加者 院長、宗教部長、大学宗教主任、総合人文学科長、
総務部長、総務課長ほか 計 13 名

◇第 21 回キリスト者教員研修会

日 時 2017 年 1 月 10 日 (火) 14 時～ 19 時 30 分

場 所 土樋キャンパス 8 号館第 1 会議室

主 題 「大学礼拝への奨励と説教」

発題者 野村信宗教部長

参 加 教育職員 14 名、事務職員 3 名 計 17 名

◇宗教委員会

日 時 2017 年 3 月 17 日 (金) 13 時

場 所 土樋キャンパス 8 号館第 2 会議室

◇学長招待卒業生懇談会

日 時 2017 年 3 月 14 日 (火) 12 時～ 13 時

場 所 土樋キャンパス

出席 松本学長、宗教部長、大学宗教主任 2 名、卒業予定者 10 名 ほか計 18 名

◇『大学礼拝』

135 号「新入生歓迎号」、136 号「秋号」、137 号「クリスマス特集号」

◇『キリスト教活動のハンドブック』

2017 年 3 月発行

◇『礼拝説教集』

第 21 号 (2017 年 3 月末日発行)

◇『宗教活動報告書』

第 17 号 (2016 年 8 月 31 日発行)

◇卒業記念礼拝

日 時 2017 年 3 月 23 日 (木) 10 時 30 分

説教者 野村信宗教部長

説教題 「地の塩、世の光」

◇その他

礼拝堂管理、図書資料受入、調査回答

東北学院大学教職員修養会 キリスト者教員研修会報告書

第 18 号 2017 年 8 月 31 日発行

発行責任者	宗 教 部 長	野 村	信
編集責任者	宗 教 部 長	野 村	信
出 版 社	株式会社アクトジャパン		
問い合わせ先	東北学院大学総務課		
〒 980-8511	仙台市青葉区土樋 1 の 3 の 1		
	電話 022 - 264 - 6428		

